

志木市遺跡群 10

西原大塚遺跡 第37地点

西原大塚遺跡 第39地点

中道遺跡 第44地点

2000

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太蔵

現在、志木市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、平成5年度に新規に登録された大原遺跡を加え、16遺跡にのぼります。

本来、これらの貴重な文化財は現状のまま後世に伝えるのが望ましいのですが、土木工事等で現状保存が困難な場合は、代替措置として記録保存のための発掘調査を行うことになっています。

しかし、個人専用の住宅建設などは、その発掘調査の費用負担が、困難であるため、志木市では、昭和62年度から国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

本書は、平成9年度の確認調査・発掘調査等14地点と、平成10年度の18地点の調査を実施した個人専用住宅建設に伴う発掘調査の成果を調査報告書としてまとめたものです。

今回の報告では、西原大塚遺跡第37・39地点、中道遺跡第44地点の発掘調査の成果が収録されています。特に、西原大塚遺跡第39地点では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓から、市内では初めて、石包丁・削器といった石器が発見されたことが注目されます。

これにより、志木市の歴史に、また新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が研究者のみならず、市民をはじめ多くの方々の埋蔵文化財に対する理解に活用されますよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の平成9・10年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。発掘調査は、平成9年度が平成9年4月1日より平成10年3月31日まで、平成10年度が平成10年4月1日より平成11年3月31日までの期間を対象とした。
3. 本書の作成において、執筆は尾形則敏・深井恵子が分担して行い、編集は尾形が行った。なお、朝霞市博物館の野沢 均氏には、中・近世の遺物についてご教示をいただいた。

尾形則敏 第1章、第2～4章第1節・第2節の検出された遺物、第5章

深井恵子 第2～4章第2節の検出された遺構

4. 西原大塚遺跡第39地点の縄文・弥生時代の石器の実測及び観察表の作成は、(有)アルケオリサーチ 代表取締役藤波啓吾に依頼した。
5. 遺物の実測は、尾形・深井の指導の下、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。写真撮影は尾形が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。

○ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

J = 縄文時代の住居跡 Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 D = 土坑

M = 溝跡 P = ビット 方 = 方形周溝墓

○遺物挿図版中、網点スクリーントーンは以下の内容を示す。

土器…赤色顔料の範囲を示すが、遺物番号下に黒影とあるものは、黒色土器の黒影範囲を示す。

陶器…土器番号下に灰釉とあるものは、平安時代の灰釉陶器の施釉範囲を示す。

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会 (生涯学習課文化財保護係)

教 育 長 秋山 太蔵

教育総務部長 川目 憲夫

生涯学習課長 鈴木 重光

文化財保護係長 関根 正明

文化財保護係主査 佐々木保俊

文化財保護係主任 清水あや子

文化財保護係主任 尾形 則敏

志木市文化財保護委員 (5名)

神山健吉 (委員長)・井上國夫 (副委員長)・高橋長次・高橋 豊・内田正子

8. 発掘調査及び整理作業参加者

調査担当者 尾形剛敏

発掘調査員 深井恵子

発掘・整理協力員 太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館
朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立考古館
志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗園小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・梅沢太久夫・江原 順・柿沼幹夫
小川貴司・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小島清一・小宮恒雄
笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・鈴木敏則・隅田 眞・高橋 学・田中広明・照林敏郎
時枝 務・並木 隆・根本 靖・野沢 均・土師由美・原田一敏・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖
藤波啓容・牧田 忍・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・山田尚友・和田晋治
西原大塚遺跡 第37地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡 第39地点（開発主体者 個人）

中 道 遺 跡 第44地点（開発主体者 個人）

目 次

はじめに	
例 言	
目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
図 版 目 次	
第1章 平成9・10年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	7
第2章 西原大塚遺跡第37地点の調査	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 検出された遺構と遺物	11
(1) 住居跡	11
(2) 土 坑	20
(3) 遺構外出土遺物	22
第3章 西原大塚遺跡第39地点の調査	25
第1節 遺跡の概要	25
第2節 検出された遺構と遺物	26
(1) 縄文時代	26
(2) 弥生時代後期～古墳時代前期	36
(3) 遺構外出土遺物	38
第4章 中道遺跡第44地点の調査	42
第1節 遺跡の概要	42
第2節 検出された遺構と遺物	43
(1) 土 坑	43
(2) 溝 跡	43
(3) 遺構外出土遺物	44
第5章 まとめ	48
図 版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	市城の地形と調査地点-平成9年度- (1/20000)	2
第2図	市城の地形と調査地点-平成10年度- (1/20000)	4
第3図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	9
第4図	遺構分布図 (1/200)	10
第5図	165号住居跡 (1/60)	12
第6図	166・167・168号住居跡 (1/60)	15
第7図	169・171号住居跡 (1/60)	17
第8図	住居跡出土遺物1 (1/4)	18
第9図	住居跡出土遺物2 (1/3)	19
第10図	土坑 (1/60)	21
第11図	遺構外出土遺物 (1/3)	23
第12図	遺構分布図 (1/200)	25
第13図	61・63号住居跡 (1/60)	27
第14図	61号住居跡出土遺物1 (1/4)	28
第15図	61号住居跡出土遺物2 (1/3)	29
第16図	61号住居跡出土遺物3 (1/3)	30
第17図	61号住居跡出土遺物4 (1/3)	31
第18図	61号住居跡出土遺物5 (1/3)	32
第19図	62・63号住居跡出土遺物 (1/3)	35
第20図	175号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)	36
第21図	10号方形周溝墓 (1/60)	37
第22図	10号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	37
第23図	遺構外出土遺物 (1/3)	39
第24図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	42
第25図	遺構分布図 (1/200)	43
第26図	136号土坑 (1/60)	44
第27図	22・23号溝跡 (1/60)	45
第28図	遺構外出土遺物 (1/3)	46

表 目 次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成9年度調査地点一覧	3
第3表	平成10年度調査地点一覧	5
第4表	西原大塚遺跡第39地点出土の石器一覧表	40

图 版 目 次

- 图版 1 西原大塚遺跡第37地点
1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3~6. 165号住居跡遺物出土状態 7. 165号住居跡
- 图版 2 西原大塚遺跡第37地点
1. 166号住居跡 2. 167号住居跡 3·4. 168号住居跡遺物出土状態
5. 168号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 6. 168号住居跡 7. 169号住居跡
8. 169号住居跡貯蔵穴
- 图版 3 西原大塚遺跡第37地点
1. 282·283号土坑 2. 285号土坑 3. 165号住居跡出土遺物
- 图版 4 西原大塚遺跡第37地点
1. 166号住居跡出土遺物 2. 167号住居跡出土遺物 3. 168号住居跡出土遺物
4. 169号住居跡出土遺物 5. 170号住居跡出土遺物 6. 遺構外出土遺物
- 图版 5 西原大塚遺跡第39地点
1. 調査区近景 2. 61号住居跡発掘調査風景 3~5. 61号住居跡遺物出土状態
- 图版 6 西原大塚遺跡第39地点
1. 175号住居跡 2. 175号住居跡遺物出土状態 3. 10号方形周溝墓発掘調査風景
4. 10号方形周溝墓土層断面 5. 61号住居跡出土遺物
- 图版 7 西原大塚遺跡第39地点
61号住居跡出土遺物
- 图版 8 西原大塚遺跡第39地点
61号住居跡出土遺物
- 图版 9 西原大塚遺跡第39地点
1. 62号住居跡出土遺物 2. 63号住居跡出土遺物 3. 175号住居跡出土遺物
4. 10号方形周溝墓出土遺物
- 图版10 西原大塚遺跡第39地点
遺構外出土遺物
- 图版11 中道遺跡第44地点
1. 調査区全景 2. 136号土坑調査風景 3·4. 136号土坑
- 图版12 中道遺跡第44地点
1. 22号溝跡 2. 23号溝跡 3. 23号溝跡出土遺物 4. 遺構外出土遺物

第1章 平成9・10年度の調査成果

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7km、東西4.7kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口6万5千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（No.7）、中道遺跡（No.5）、新邸遺跡（No.8）、城山遺跡（No.3）、中野遺跡（No.2）、氷川前遺跡（No.4）、市場裏遺跡（No.15）、市場遺跡（No.1）、田子山遺跡（No.10）、富士前遺跡（No.11）、大原遺跡（No.16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（No.12）、宿遺跡（No.14）、関根兵庫館跡（No.13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（No.6）、城山貝塚（No.9）を加えた16遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
1	市場遺跡	700m ²	宅地	遺物散布地	不明	地下式坑?	なし
2	中野	48,000m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器・縄(前・中)・弥生(前・後)、平・中・近世 古(前・後)、井戸跡・溝跡等	石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等	石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	76,000m ²	畑・宅地	城跡・集落跡	縄(前・中)、弥生(前・後)、古(前・後)、平・中・近世	住居跡、土坑、溝跡、船橋跡、溝跡等	石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
4	氷川前	20,000m ²	畑・宅地	遺物散布地	古墳・平安?	なし	なし
5	中道	66,000m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄(中)、弥生(後)、古(前・後)、平・中・近世	石器集中地立、住居跡、土坑、溝跡、道路状遺構等	石器、人骨、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
6	塚ノ山古墳	800m ²	林	古墳?	古墳?	なし	なし
7	西原大塚	182,700m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器・縄(前・後)、弥生(後)、古(前・後)、平・中・近世	石器集中地立、住居跡、土坑、井戸跡・溝跡等	石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
8	新邸	24,000m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄(前)、古墳(前)、中道	住居跡、土坑、溝跡、新切状遺跡、ピット跡等	石器、縄文土器、土師器、古銭、陶磁器等
9	城山貝塚	900m ²	林	貝塚	縄(前)	斜面貝塚	縄文土器、石器、貝
10	田子山	65,000m ²	畑・宅地	集落跡	縄(前・中)、弥生(後)、古(前・後)、平・中・近世、近代	住居跡、土坑、ローン探堀遺構、方形・円形周溝墓	縄文・弥生土器、炭化種子、土師器、須恵器、陶磁器等
11	富士前	1,000m ²	宅地	集落跡	弥生(後)~古(前)	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800m ²	畑	集落跡	古(前)	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	5,400m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,000m ²	田	館跡	中世	遺跡、井桁状構造物	木・石製品
15	市場裏	7,000m ²	宅地	墓跡	弥生(後)~古(前)、近代	方形周溝墓	弥生土器、土師器、土師瓦
16	大原	2,300m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

平成11年11月30日 現在



第1図 市城の地形と調査地点—平成9年度— (1/20000)

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町3丁目	1,562.00		平成9年5月1日 ～9月10日	平成5年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡査会が実施
		幸町3丁目	894.00		10月20日～ 12月11日	
2	西原大塚遺跡 第37地点	幸町3丁目 3107-1の一部	220.00	平成9年4月8日	5月6日～ 6月5日	後述 第2章参照
3	西原大塚遺跡 第38地点	幸町3丁目 3106-5	249.49	4月10日		遺構・遺物は検出されなかった
4	中道遺跡 第42地点	柏町5丁目 2952-2	98.52	5月16日		遺構・遺物は検出されなかった
5	中野遺跡 第44地点	柏町1丁目 1516-14	160.64	5月23日		遺構・遺物は検出されなかった
6	馬場遺跡 第2地点	下宗園1丁目 1942-2	395.85			現地踏査は6月6日に実施
7	西原大塚遺跡 第39地点	幸町3丁目 3129-3	63.76	8月5日	8月7日～ 8月28日	後述 第3章参照
8	中道遺跡 第43地点	柏町5丁目 2950-37-40	280.55	8月8日		盛土保存適用
9	中野遺跡 第45地点	柏町1丁目 1516-5・6	136.89			工事立会いは8月21日に実施 遺構・遺物は検出されなかった
10	中道遺跡 第44地点	柏町5丁目 2967-3	221.28	9月18日	9月24日～ 10月1日	後述 第4章参照
11	中道遺跡 第45地点	柏町4丁目 2715-1	131.86	10月20日		盛土保存適用
12	田子山遺跡 第50地点	本町2丁目 1728-1	229.39	11月27日		遺構・遺物は検出されなかった
13	中野遺跡 第46地点	柏町2丁目 1209-13、14	68.31			工事立会いは12月8日に実施 遺構・遺物は検出されなかった
14	中野遺跡 第47地点	柏町2丁目 1209-14、15	85.28			
合 計			4,797.82			

第2表 平成9年度調査地点一覧



富
士
市



第2図 市城の地形と調査地点—平成10年度—(1/20000)

番号	調査地点	所在地	面積(m ²)	確認調査日	調査期間	備考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町2丁目 3049他4筆	472.00		5月25日～ 6月29日	平成5年度からの継続事業
		幸町2丁目 3049-1他4筆	842.00		10月20日～ 平成11年2月11日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
2	新邸遺跡 第7地点	柏町5丁目 2932-3の一部	132.72	4月13日		遺構・遺物は検出されなかった
3	西原大塚遺跡 第40地点	柏町3丁目 3133-12	59.50	4月21日		遺構・遺物は検出されなかった
4	城山遺跡 第36地点	柏町3丁目 2629-2	361.18	4月23日		盛土保存適用
5	西原大塚遺跡 第41地点	幸町3丁目 3156-4の一部	20.39	5月19日		遺構・遺物は検出されなかった
6	中野遺跡 第48地点	柏町1丁目 1494	73.70			工事立会いは5月21日に実施
7	田子山遺跡 第51地点	本町2丁目 1729-1・5	1,475.17	7月22日	7月24日～ 8月14日	発掘調査は志木市遺跡調査会が実施 宅地部分は盛土保存適用
8	西原大塚遺跡 第42地点	幸町3丁目 3123-2	335.35	7月28日		遺構・遺物は検出されなかった
9	西原大塚遺跡 第43地点	幸町3丁目 3161-1他	2,274.00	9月3日～5日		遺構・遺物は多数検出されたが、 計画の実施は見合わせのため、中断
10	田子山遺跡 第52地点	本町2丁目 1735-3	99.36	9月22日		盛土保存適用
11	富士前遺跡 第17地点	本町3丁目 1879-3	82.73	10月2日		遺構・遺物は検出されなかった
12	田子山遺跡 第53地点	本町2丁目 1696-1	83.52	10月2日		盛土保存適用
13	田子山遺跡 第54地点	本町2丁目 1690-5	414.00	10月19日		盛土保存適用
14	西原大塚遺跡 第44地点	幸町3丁目 3133-13	64.51	10月28日		遺構・遺物は検出されなかった
15	田子山遺跡 第55地点	本町2丁目 1748-15	138.03	平成11年2月10日		盛土保存適用
16	田子山遺跡 第56地点	本町2丁目 1733-18	58.30	2月19日		盛土保存適用
17	田子山遺跡 第57地点	本町2丁目 1707-4	219.70	2月23日		盛土保存適用
18	中道遺跡 第46地点	柏町5丁目 2922-1	257.55	3月9日		遺構・遺物は検出されなかった
合 計			7,463.71			

第3表 平成10年度調査地点一覧

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅴ層・Ⅵ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成5年度以降区画整理事業に伴う発掘調査が進められている西原大塚遺跡でも、石器集中地点が確認されており、ナイフ形石器をはじめとする石器類が発見されている。これらの資料は、現在整理中である。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されているのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡の空白期を迎えることになる。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。本報告では、特に168号住居跡から、東京湾沿岸に中心をもつものと考えられる輪積み甕が出土したことにより、志木市の弥生文化の源流を考える上で大変貴重な発見となったと言える。また、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

古墳時代の後期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマド

をもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡で比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、6世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数度にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム探掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅－池袋間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、昭和48（1973）年に西原大塚遺跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、昭和57（1982）年までは、志木

市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。昭和58（1983）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、昭和60（1985）年には本市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、本市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要がある。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、昭和62（1987）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、昭和62（1987）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数については逆に過去最高の8件を越え9件にのぼり増加したという現象が生じた。これについては、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したのと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性ある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用とした制度を導入するに至っている。

平成9年度は、14件の調査（確認調査9件、工事立会い調査3件、現地踏査1件、区画整理事業に伴う調査1件）を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は3件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は2件である。なお、盛土保存の対象は2件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅9件、共同住宅2件、分譲住宅1件、住宅兼物置兼駐車場1件、区画整理事業1件である。

平成10年度は、18件の調査（確認調査16件、工事立会い調査1件、区画整理事業に伴う調査1件）を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は0件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は2件である。なお、盛土保存の対象は8件（全域対象7件、一部対象1件）であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅8件、分譲住宅4件、共同住宅1件、農地土壌改良1件、駐車場建設1件、宅地造成1件、保育所建設1件、区画整理事業1件である。

第2章 西原大塚遺跡第37地点の調査

第1節 遺跡の概要

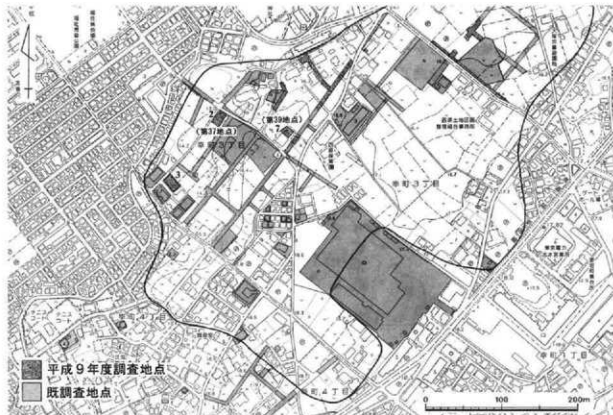
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目一帯に広がる市域最大規模の遺跡で、東武東上線志木駅から1km程西方に位置している。遺跡は、北西方向に柳瀬川を望む台地上に立地するが、武蔵野台地の北端であるため、標高が遺跡南端で約19m、北端で約13mを測るよう、南から北方向にかけて徐々に標高が低くなり、北側の標高約8mの低地へと移行している。また、台地から低地への移行の地形は、遺跡の西側ではゆるやかな傾斜地であるが、北側では比較的急な段差状を呈している。遺跡の現況は大部分が畑地であるが、この地区で西原特定土地区画整理事業が実施されており、今後、急速に住宅建設を始めとする各種開発行為の増大が予想される。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明してきた。特に、大規模開発である区画整理事業に伴う調査により、面的な貴重な資料の蓄積が進み、今後は総合的な研究が期待されるものである。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成9年4月8日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、



第3図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成11年11月30日 現在

バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、住居跡と思われる遺構が、ほぼ調査区域内全面にわたって分布しているものと判断できた。そのため、ただちに依頼者に調査の結果の旨を連絡し、その日は埋め戻し作業を行い、調査を終了した。

その後、事前協議を行った結果、教育委員会が発掘調査を行うことに決定したため、5月6日の午後からバックホーとダンプを使用し、調査区全面の表土剥ぎ作業を開始した。残土については、調査区域外にすべて搬出することにし、翌7日にはその作業を終了した。

人員導入による発掘調査は、5月8日から開始した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行ったが、あまりの強風のため、午後は調査を中止せざるを得なかった。

9日、再度、細部の遺構確認作業を行った結果、調査区域内には弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての住居跡が7軒(165～171Y)分布していることが判明した。また、それらの住居跡は攪乱が著しいため、住居跡の精査を行う前にまず、攪乱抜きを行った。同日、166Yの精査を開始し、12日には、166Yの測量を終了する。

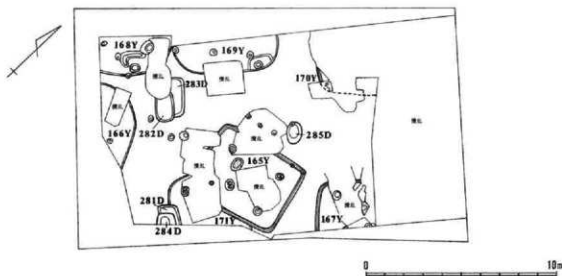
13日、166Yの写真撮影を行い、168・169Yの精査を開始する。15日、169Yの写真撮影・測量を終し、19日には168Yの写真撮影を終了し、測量を開始する。同日、165Yの精査を開始する。165Yについては、覆土及び床面上から多くの炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられる。

23日、165Yと重複する171Yを検出した。171Yは165Yに切られていることが判明した。26日、165Yの遺物出土状態の写真撮影を終了し、測量を開始する。また、167・170Y、282・283号土坑(282・283D)の精査を開始する。28日には、165・171Yの測量を終了する。

6月2日、167・170Yの測量・写真撮影を終了する。3日、165・171Yの遺構写真撮影を終了し、プレ調査のためのグリッドを2ヶ所設定し、掘り下げ開始。4日、285Dの精査を行う。

5日、285Dの写真撮影・測量を終了する。プレ調査のためのグリッドについては、立川ローム層に達したが、遺物は検出されなかったため、掘り下げを終了した。

これにより、すべての調査を完了した。



第4図 遺構分布図 (1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

165号住居跡(第5図)

〔住居構造〕171号住居跡を切る。攪乱によりかなりの部分が壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 5.17×4.00m。(壁高) 15~19cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 上幅15~22cm・下幅4~7cm・深さ6~12cmを測り、確認できる範囲では全周する。(床面) 住居中央がよく硬化しており、貼床の厚さは2~8cmである。(炉跡) 住居中央よりやや西側に位置する。75×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さは6cm程である。(柱穴) 各コーナーから4本検出されたが、北東コーナーのみ重複した形態をとる。深さは47~80cmを測る。(覆土) 上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土。中層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。下層はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕床面上及び覆土中から、比較的によく土器が出土した。炭化種子(ヤマモモ)1点出土。

〔時期〕古墳時代前期。

〔所見〕住居全体から炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と思われる。

165号住居跡出土遺物(第8図1~7、第9図11~24)

埴形土器(第8図1・2)

1は現器高4.8cm、推定底径3.4cm。底部は平底で、頸部は「く」字状を呈し、口縁部はやや内湾気味に開く。全面赤彩が施され、胎土は精練されている。内外面ヘラ磨き調整が施されるが、内面口縁部には僅かにハケ目痕が残る。覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

2は現器高7.9cm、口径9.7cm。頸部は「く」字状を呈し、口縁部は外傾する。色調は淡褐色を呈し、胎土には暗茶褐色微粒子・砂粒を含む。内面口縁部及び外面はヘラ磨き調整、内面は以下ヘラナデが施される。覆土中からの出土で、遺存度は口縁部から胴部上半にかけて2/3程である。

器台形土器(第9図11)

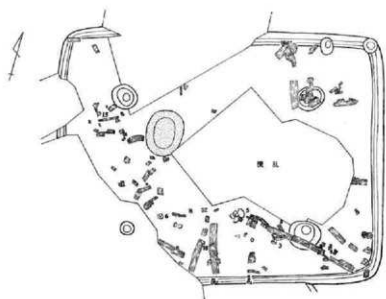
小型器台の口縁部小破片で、全面赤彩が施される。胎土には暗黄褐色粒子を僅かに含む。内外面ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

高坏形土器(第8図3・4、第9図12・13)

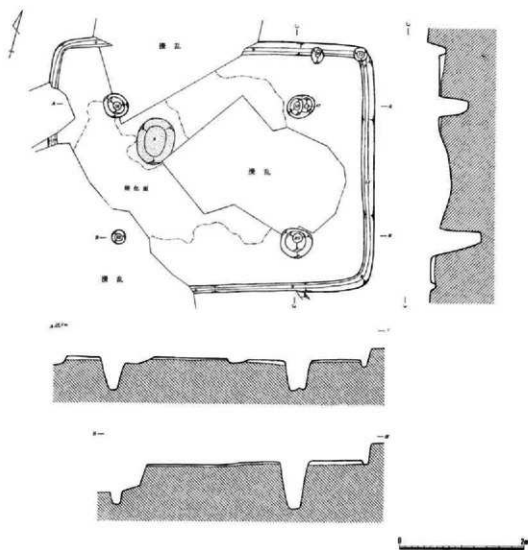
3は器高13.9cm、推定口径22.4cm、底径10.7cm。坏部は下半部に弱い稜をもち、口縁部は直線的に外傾する。脚台部は基本的には「ハ」字状を呈するが、裾部は内湾気味である。色調は淡褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を多く含む。坏部内外面及び脚台部外面はヘラ磨き調整が施されるが、特に坏部内外面には部分的にハケ目痕が残る。脚台部内面はハケ目調整が施される。住居南東コーナーの床面上の出土で、遺存度は2/3程である。

4は現器高6.8cm、推定底径12.4cm。「ハ」字状を呈する脚台部で、裾部は外反する。外面は赤彩が施され、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はハケ目調整後ヘラナデが施されるが、裾部付近にはヘラ磨き調整が僅かに施される。外面は剥落が著しいが、ハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。覆土中の出土で、脚台部を4/5程遺存する。

12は「ハ」字状を呈する脚台部小破片で、色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。



遺物出土状態



第5図 165号住居跡 (1/60)

13は裾部が有段を呈する脚台部小破片で、色調は明橙色を呈し、胎土には白色粒子・暗茶褐色・砂粒を含む。内面はナデ、外面は裾部が縦方向に粗いハケ目調整、その上方はヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

壺形土器（第9図14～17）

14は複合口縁を呈する口縁部小破片で、口唇部にはLRの単節斜縄文がまわる。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はハケ目調整後ナデ、外面は複合部がナデ、以下ハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

15は頸部付近の小破片で、屈曲部には断面三角形の凸帯がまわる。色調は暗橙色を基調とし、胎土には暗茶褐色粒子・暗橙色粒子・砂粒・小石を含む。内面は頸部がハケ目調整、胴部はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。西壁近くの床面上10cm浮いた覆土中からの出土である。

16は肩部小破片で、上部にはRの無節斜縄文が施文されている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子を多く含む。内面及び外面文様部はハケ目調整、外面は以下ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

17は胴部下半から底部にかけての破片である。色調は黒褐色を基調とし、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

壺形土器（第8図5～7、第9図18～23）

5は現器高18.8cm、推定口径16.7cm。最大径を胴部中位に測り、頸部は「く」字状を呈し、口縁部は外反する。色調は暗橙色を基調とするが、全体に黒く煤けている。胎土には暗茶褐色・暗黄褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は粗いハケ目調整が施される。住居南東コーナー付近のほぼ床面上の出土で、遺存度は1/2程である。

6は現器高4.8cm、底径7.8cm。裾部が内湾する「ハ」字状の脚台部である。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内外面ヘラナデが施される。住居南西コーナー付近のほぼ床面上の出土で、脚台部を4/5強遺存する。

7は現器高7.8cm、推定底径10.6cm。「ハ」字状を呈する脚台部である。色調は暗黄褐色を基調とするが、部分的に黒く煤けている。胎土には金雲母・砂粒を含む。内外面ヘラナデが施される。覆土中からの出土で、脚台部を2/3程遺存する。

18～21は「く」字状を呈する口縁部破片である。18は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子・暗黄褐色粒子を多く含む。内外面ハケ目調整が施される。南壁近くの床面上11cm浮いた覆土中からの出土である。19は色調が暗橙色～黒褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子・暗黄褐色粒子を多く含む。内面口縁部及び外面はハケ目調整、内面胴部はヘラナデが施される。覆土中からの出土である。20・21は口縁部内外面に横ナデが施される土器で、20は色調が黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、内面は以下ヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。21は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、内面は以下ヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

22・23は胴部破片である。22は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子・小石を含む。内面はヘラナデ、外面は粗いハケ目調整が施される。23は色調が黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を多く含む。内面はヘラ磨き調整、外面は上下で羽状にハケ目調整が施される。いずれも覆土中からの出土である。

鉢形土器 (第9図24)

胴部上半に膨らみをもつ鉢形土器の頸部から胴部中位にかけての破片である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母・暗黄褐色粒子・砂粒を含む。頸部内外面は横ナデ、以下内外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

166号住居跡 (第6図)

[住居構造] 住居の北東部分以外は調査区域外のため詳細は不明である。(壁高) 5~14cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を除き、よく硬化している。貼床は厚さ6cm程施されている。(柱穴) 1本確認できたが後世のものと思われる。(覆土) ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から土器小破片が僅かに出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

166号住居跡出土遺物 (第9図25)

基本的には輪積み甕の口縁部小破片であるが、輪積み痕はヘラナデにより大部分消去されている。口唇部には交互押塗が加えられる。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を多く含む。内面は口縁部がハケ目調整後軽い横ナデ、頸部はヘラナデ、外面は口縁部が軽い横ナデ、頸部はヘラナデが施される。東壁近くのほぼ床面上からの出土である。

167号住居跡 (第6図)

[住居構造] 住居北西部以外は調査区域外にあり、さらに攪乱により大きく破壊されている。(平面形) 隅丸方形か。(壁高) 15~19cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 上幅11~17cm・下幅5cm・深さ3~6cmを測り、確認できる範囲では全周する。(床面) 壁際を除いて全体的によく硬化している。4~12cmの厚さで貼床が施されている。(炉跡) 攪乱のため詳細は不明であるが、住居の北壁に偏って位置し、10cm弱の掘り込みをもつ地床炉である。炉の上から石が1点検出された。(柱穴) 西コーナーより検出された深さ69cmのものが、主柱穴の1本と思われる。(覆土) 4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 覆土中から土器小破片が僅かに出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

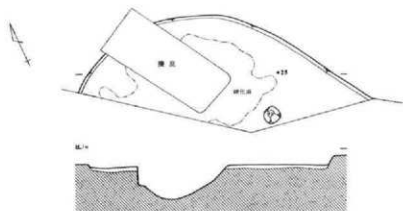
167号住居跡出土遺物 (第9図26~29)

壺形土器 (第9図26)

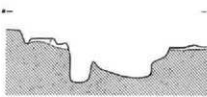
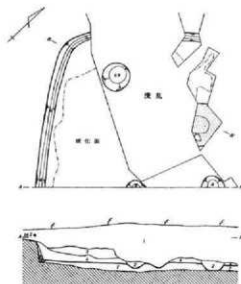
頸部小破片である。口縁部付近の内面にはLRの単節斜縄文とその下端に3条の自縄結節縄文がまわる。文様部以外は赤彩が施される。胎土には暗黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。内外面はヘラ磨き調整が施される。床面上からの出土である。

甕形土器 (第9図27~29)

27は輪積み甕の口縁部小破片である。口唇部には押塗が加えられ、輪積み痕は2段観察される。輪積みは1段ずつ指頭押塗が加えられ成形されたのではなく、すべて粘土が積まれた後に加えられていることがわかる。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を僅かに含む。外面輪積み部を除き、ハケ目調整が施される。床面上からの出土である。

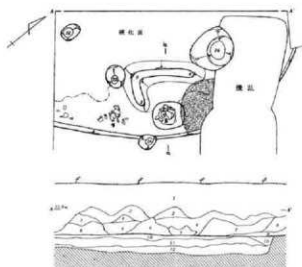


166号住居跡



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黄褐色土（黄褐色のピット）。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黄褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 7層 結核。

167号住居跡



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黄褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
- 4層 ローム粒子を僅かに含む黒色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロック・小砂粒を含む暗黄褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
- 7層 ローム粒子を含む暗黄褐色土。
- 8層 ローム粒子を僅かに含む黄褐色土。
- 9層 ローム粒子を含む暗黄褐色土（ロード）。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黄褐色土。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。

赤色砂利層線出範囲



168号住居跡

第6図 166・167・168号住居跡 (1/60)

28・29は胴部小破片である。28は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を多く含む。覆土中からの出土である。29は色調が黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を僅かに含む。床面上からの出土である。いずれも内面がヘラナデ後ヘラ磨き調整、外面はハケ目調整が施される。

168号住居跡（第6図）

〔住居構造〕住居の大部分が調査区域外であることと一部攪乱により壊されているため詳細は不明である。（壁高）28cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）壁際を除き良く硬化している。20～32cmの厚さで貼床が施されており、土層図の10～12層に相当する。（柱穴）深さ76の支柱穴1本と、深さ22cmの梯子穴と思われる小ビット1本が検出された。（貯蔵穴）住居東コーナーに位置し、50×45cmの隅丸方形を呈し、深さは20cmを測る。西側に幅30cm前後・高さ3～9cmの「L」字状を呈する凸堤が巡っている。貯蔵穴内より台付甕が出土し、さらにその下から焼礫が出土した。（覆土）9層に分層される。特に6層の堆積が顕著であることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕貯蔵穴内とその周辺の床面上から土器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期中葉。

〔所見〕東コーナーの貯蔵穴付近から赤色砂利層が5～13cm程の厚さで検出された。いわゆる祭壇状遺構と思われる。

168号住居跡出土遺物（第8図8・9、第9図30～32）

壺形土器（第9図30～32）

30～32は壺形土器である。30は肩部小破片で、文様は端末結節を伴うRLの単筋斜縄文が施文されている。外面無文部は赤彩が施される。胎土には暗黄褐色粒子を僅かに含む。31は口縁部小破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子・砂粒を含む。内外面ナデ調整が施される。32は底部破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子を多く含む。内面はハケ目調整、外面はヘラ磨き調整が施される。すべて覆土中からの出土である。

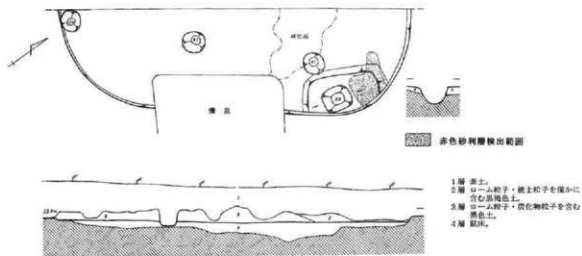
壺形土器（第8図8・9）

8は現器高39.9cm、推定口径24.2cm。胴部上半に膨らみをもち、頸部でくびれ、口縁部は外反する。最大径を口縁部に測り、口唇部外側にはハケ状工具による刻みが加えられる。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子を多く含む。内面口縁部及び外面はハケ目調整、内面は以下胴部中位がヘラナデ、下半はヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

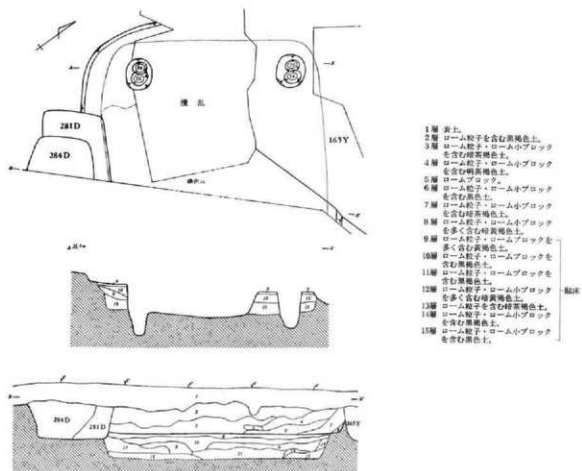
9は現器高19.3cm、推定口径24.5cm。胴部上半に最大径を測り、頸部でくびれ、口縁部は外反する。口縁部には4段の輪積み痕が残り、輪積みは1段ずつ指頭押捺が加えられ成形されている。口唇部には交互押捺が加えられる。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子・砂粒を僅かに含む。内面口縁部及び外面胴部はハケ目調整、内面は以下ヘラナデが施される。貯蔵穴左横のほぼ床面上からの出土で、遺存度は口縁部から胴部下半にかけて1/5程である。

169号住居跡（第7図）

〔住居構造〕住居の大半は調査区域外にあり、東壁の一部も攪乱により壊されているため詳細は不明である。（壁高）4～10cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）全体に硬化



169号住居跡



171号住居跡

第7図 169・171号住居跡 (1/60)

しているが、貯蔵穴の付近がよく踏み固められていた。貼床の厚さは、6～32cmである。(柱穴)本住居のものは確認できなかった。(貯蔵穴)東コーナーに付設された135×70cm・高さ5cm前後のテラス状の隆起上に位置し、45×38cmの隅丸方形を呈する。深さ28cmを測る。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土)2層に分層される。

〔遺物〕土器小破片が僅かに出土した。

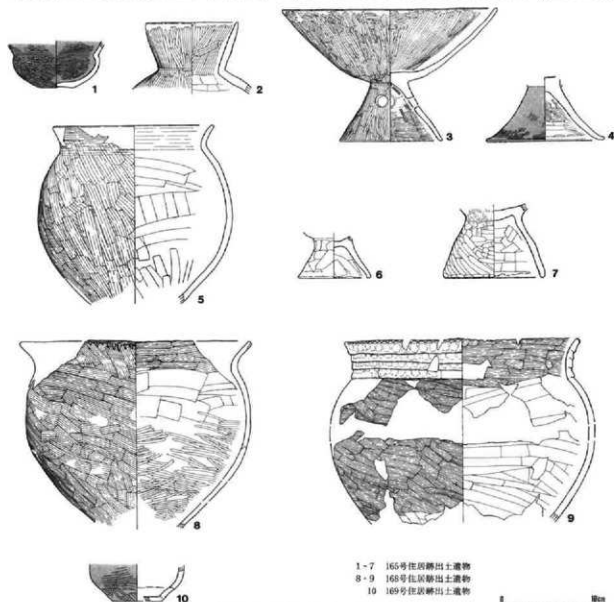
〔時期〕弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

〔所見〕東コーナーのテラス状隆起部分から赤色砂利層が3cm程の厚さで検出された。いわゆる祭壇状遺構と思われるが、赤い砂利は貯蔵穴の上層も覆っていた。床面の数か所から炭化材が検出されたことから、焼失住居と考えられる。

169号住居跡出土遺物 (第8図10、第9図33～38)

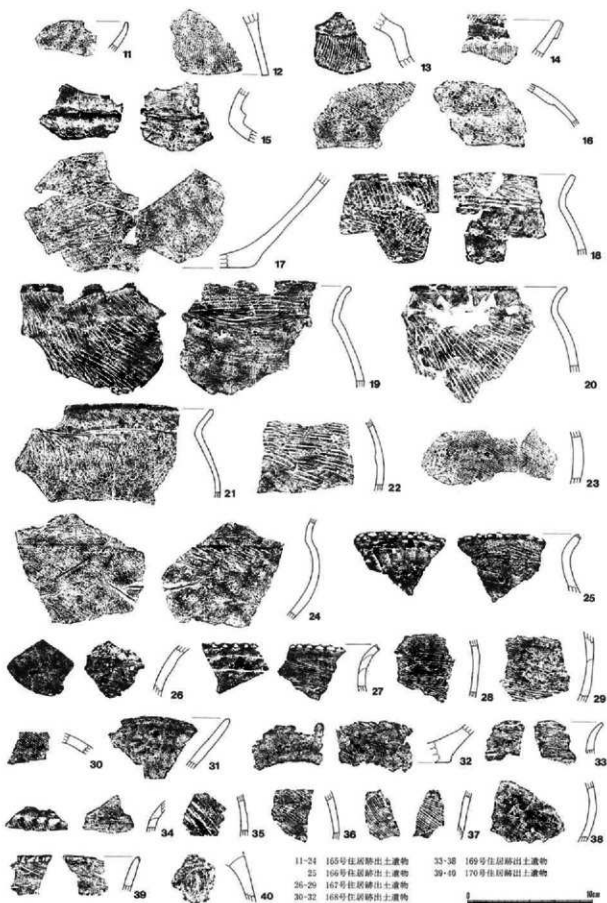
埴形土器 (第8図10)

現器高3.9cm、推定底径5.2cm。平底を呈する埴形土器である。外面は赤彩が施され、胎土には暗橙



1-7 165号住居跡出土遺物
8-9 168号住居跡出土遺物
10 169号住居跡出土遺物

第8図 住居跡出土遺物1 (1/4)



第9圖 住居跡出土遺物 2 (1/3)

色粒子を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

壺形土器（第9図33～38）

33は口縁部小破片で、色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。34は輪積み甕の頸部小破片で、輪積み痕は1段観察される。輪積みは1段ずつ指頭押捺が加えられ成形されたのではなく、すべて粘土が積まれた後に加えられていることがわかる。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を含む。内面及び外面胴部にはハケ目調整が施される。貼床中からの出土である。35は色調が暗黄褐色を基調とし、胎土には暗黄褐色粒子を多く含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。36は色調が暗茶褐色～黒褐色を呈し、胎土には暗褐色粒子を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。37は色調が黒褐色を呈し、胎土には暗褐色粒子を含む。内外面ヘラナデが施される。覆土中からの出土である。38は色調が黒褐色を基調とし、胎土には暗褐色粒子を含む。内面はヘラナデ後ヘラ磨き調整、外面はハケ目調整が施される。覆土中からの出土である。

170号住居跡（第4図）

[住居構造] 大部分が攪乱により壊されており、住居南壁のごく一部しか確認できなかった。（壁高）6cmを測る。（壁溝）確認できた部分では、上幅12cm・下幅6cm・深さ8cmを測る。（床面）硬化している。（柱穴）柱穴に相当するものは確認できなかった。

[遺物] 覆土中から土器小破片が僅かに出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

170号住居跡出土遺物（第9図39・40）

39・40はいずれも覆土中から出土の壺形土器である。39は口縁部小破片で、口唇部外面には刻みが加えられる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施される。40は脚台部小破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

171号住居跡（第7図）

[住居構造] 165号住居跡・281・284号土坑に切られる。住居東側は調査区域外にあり、大きく攪乱もされているため一部しか確認できなかった。（平面形）隅丸方形か。（壁高）11～22cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）よく硬化している。貼床は9層以下が相当し、約40cmの厚さを測る。（柱穴）西と北コーナーに主柱穴と思われるものが2本ずつ重複した形で検出された。深さは床面より70～84cmを測る。（覆土）7層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 土器の小破片が僅かに出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 弥生時代後期末葉から古墳時代初頭。

（2）土坑

281号土坑（第10図）

[構造] 171号住居跡を切り、284号土坑に切られる。南東側は調査区域外にあると思われる。（平面形）

長方形か。(規模) 不明×1.00m。(長軸方位) N-55°-W。(深さ) 55cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 3層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明。

282号土坑(第10図)

[構造] 283号土坑を切る。西側は攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×0.98m。(長軸方位) N-53°-W。(深さ) 25~34cmを測る。坑底は西側が深くなっており、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

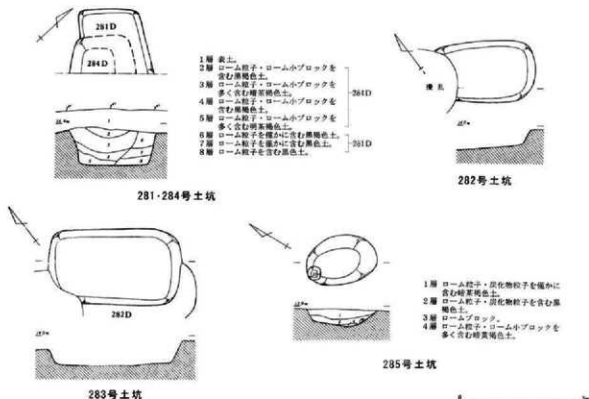
[時期] 覆土から観察して、平安時代以降と思われる。

283号土坑(第10図)

[構造] 282号土坑に切られ、一部攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 2.12×1.20m。(長軸方位) N-51°-W。(深さ) 40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、断面は皿状を呈する。(覆土) 上層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から観察して、平安時代以降と思われる。



第10図 土坑 (1/60)

284号土坑(第10図)

[構造] 281号土坑を切る。南東側は調査区域外にあると思われる。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×1.05m。(長軸方位) N-46°-W。(深さ) 55cmを測る。セクション面から観ると坑底は平坦で、壁は東側が緩やかに、西側はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明。

285号土坑(第10図)

[構造] ビットは後世のものであろう。(平面形) 楕円形。(規模) 1.12×0.78m。(長軸方位) N-46°-W。(深さ) 20-28cmを測る。坑底は東側が深くっており、壁は西側が急斜に東側は緩やかに立ち上がる。(覆土) 4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から観察して、縄文時代と思われる。

(3) 遺構外出土遺物(第11図)

縄文時代から弥生時代にかけての土器が検出されている。時期的には縄文時代前・中・後期、弥生時代後期に比定され、第1～6群土器に分類された。

第1群土器 縄文時代前期前葉の黒浜式土器(1～3)

胎土に多くの繊維を含む土器である。1は口縁部小破片で、RLの単節斜縄文が施される。色調は黒褐色を呈する。2は胴部小破片で、Lの無節縄文が施される。色調は茶褐色を呈する。3は底部破片で、LRの単節斜縄文が施される。色調は内面が黒褐色、外面が暗褐色を呈する。

第2群土器 縄文時代前期後葉の諸磯式土器(4・5)

縄文を地文に結節をもつ浮線文が施される土器である。いずれも色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。

第3群土器 縄文時代中期中葉の阿玉台・勝坂式土器(6～15)

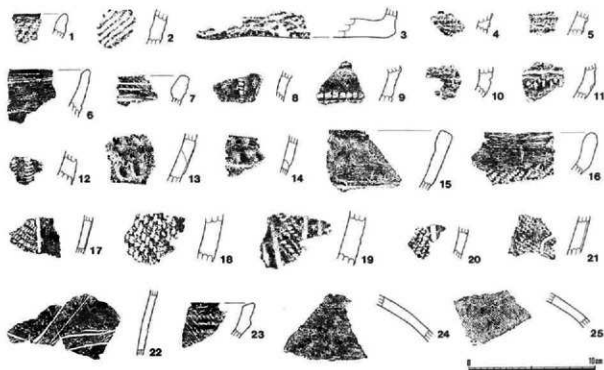
6・8～11は結節沈線により文様が描かれる土器である。10は径2mmの円形の竹管により押し引きされていることが観察できる。11は結節沈線の下に半載竹管により交互刺突文がまわる。7は単節斜縄文を地文に沈線が施される土器で、胎土には金雲母・砂粒を多く含む。12は幅広の連続した爪形文が施される土器である。13・14は輪積み痕を利用して、ひだ状に押捺文が施される土器で、ともに胎土には金雲母・砂粒を多く含む。15は無文の口縁部の直下に沈線がまわる土器で、色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

第4群土器 縄文中期後葉の加曾利E式土器(16～20)

16は口縁部小破片で、無文の口縁部の直下にRLの単節斜縄文が縦位に施される。17～21は胴部小破片で、17・19・20は単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が描かれる土器である。18は複節斜縄文が施される。

第5群土器 縄文時代後期前葉の堀之内式土器(21～23)

21はLRの単節斜縄文を地文に曲線的な沈線文が描かれている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。22は朝顔形を呈する深鉢の頸部破片である。文様は三角形を基本とした沈線区画内にLRの



第11図 遺構外出土遺物 (1/3)

単節斜縄文が充填される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。23は条線が施される粗製土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。

第6群土器 弥生時代後期の壺形土器 (24・25)

24はL Rの単節斜縄文の下端に4条の自縄結節文がまわる。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施され、無文部は赤彩される。色調は淡橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。

25は2段の端末結節縄文が施される土器で、内面はヘラナデが施される。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子・砂粒を含む。

【参考文献】

尾形則敏 1990「第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』 志木市の文化財第14集
志木市教育委員会

尾形則敏・深井恵子 1999「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』 志木市の文化財第27集 志木市教育委員会

小久保 徹・宮野和明他 1984『志木市史 原始・古代資料編』志木市史編さん室

佐々木俊俊 1989「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』 志木市の文化財第13集
志木市教育委員会

1991「第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』 志木市の文化財第16集
志木市教育委員会

1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」 志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

1996「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」 志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

- 1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第25集
志木市教育委員会
- 1998『西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理組合事業に伴う発掘調査概報』志木市遺跡
調査会 西原特定土地区画整理組合
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985「西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2
地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集 志木市教育委
員会
- 1987「第Ⅱ章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚
遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集 志木
市教育委員会
- 1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文
化財第14集 志木市教育委員会
- 1990「第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文
化財第14集 志木市教育委員会
- 谷井 彪・宮野和明・井上國夫他 1975『西原・大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集 志木
市教育委員会

第3章 西原大塚遺跡第39地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第2章 西原大塚遺跡第37地点の調査（9ページ）を参照。

(2) 発掘調査の経過

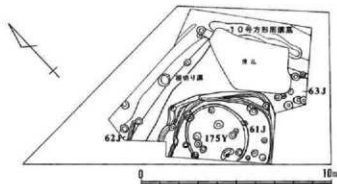
確認調査は、平成9年8月5日に実施した。調査区中央の短軸方向に、1本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った結果、縄文時代の住居跡と考えられる遺構を確認した。そのため、確認調査の結果を依頼者に報告し、協議を行った。その結果、現状保存は不可能であるということから、そのまま継続して教育委員会が発掘調査を行うことに決定した。その後、遺構のプランを確認しながら、バックホーで周囲の表土剥ぎを行った結果、遺構は方形周溝墓と思われる溝跡の一部と縄文時代中期の住居跡（61J）、そしてその住居跡に入れ子状に重複している弥生時代後期後葉の住居跡（175Y）であることが判明した。

人員導入による発掘調査は、8月7日から開始した。まず、最初に器材の搬入作業を行い、その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。午後からは、10号方形周溝墓の精査を開始する。なお、この方形周溝墓は、隣接する調査（西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査）で検出されており、明らかに本調査区域内に延びているものと考えられた。

8日には、一部溝底面を確認したが、攪乱による破壊が著しく、出土遺物はほとんどが縄文時代中期の土器であった。また、北端は根切り溝により破壊されていた。18日、根切り溝の南端から縄文時代中期のものと思われる住居跡（62J）の一部が確認されたため、精査を行った。

19日には、10号方形周溝墓を完掘し、175Yの精査を開始する。20日、10号方形周溝墓の写真撮影を行い、175Yの掘りをほぼ終了した。21日、175Yの写真撮影を終了し、その後、61Jの精査を開始する。61Jからはかなり完形に近い土器が多数出土しており、その土器の特徴から、加曾利E2式期の所産のものであることが判明した。

22日、175Yは掘り方の精査も終了し、実測についてもすべて完了した。61Jは遺物を平板にドット



第12図 遺構分布図 (1/200)

ドットに落して取り上げていくことにした。

25日、61Jの床面と壁溝を確認し、東側部分については別の住居跡（63J）であることが判明した。

27日には、61・63Jの写真撮影を終了し、28日には実測を終了、すべての調査を完了する。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代

61号住居跡（第13図）

〔住居構造〕 南半部は調査区域外にあると思われる。63号住居跡を切り、175号住居跡に切られる。（平面形） 隅九方形か。（壁高） 22～32cmを測り、急斜に立ち上がる。（規模） 不明×6.30cm。（壁溝） 住居の北側では二重の壁溝が確認された。外側の壁溝は、上幅16～30cm・下幅4～10cm・深さ6～12cmを測る。内側は上幅14～30cm・下幅4～10cm・深さ6～13cmを測る。2本の溝が合流する部分では、幅が広がっている。（床面） 床面は直床と思われ、全体に硬くしまっている。（炉跡） 楕円形を呈する地床炉で、規模は床面が掘り込まれている外側で143×138cm、焼土の見られる内側では90×75cm、深さは21cmを測る。（柱穴） 多数のピットが検出されたが、2本ずつ重複しているコーナー付近の深さ60～67cmのものが本住居跡に伴うと思われる、内側の壁溝にかかる2本が拡張後の主柱穴と考えられる。（覆土） 3層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 覆土中及び床面上から多くの土器・石器が出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉（加曾利EⅡ式期）。

〔所見〕 二重の壁溝と重複する柱穴が確認されたことから、拡張住居と考えられる。

61号住居跡出土遺物（第14～18図、第4表）

第15図7～18は縄文時代中期中葉の阿玉台・勝坂式土器である。

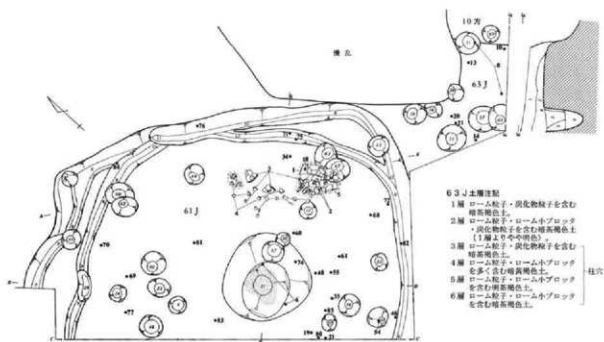
7は口縁部小破片で、口唇部は肥厚し、外面口縁部直下には幅広爪形文がまわる。胎土には金雲母を多く含む。8は隆帯に沿って幅広爪形文が施文され、その外側には結節沈線が施される。9は無文地に爪形文が施文される土器で、胎土には金雲母を多く含む。

10は隆帯の下に幅広爪形文、波状文、RLの単節斜縄文が施文される。11は横位文縁帯の部分で、半截竹管による平行沈線、結節沈線が施文されている。12は刻みをもつ隆帯に沿って半截竹管による平行沈線が施され、その下方には鋸歯文あるいは波状文が横方向と縦方向に観察される。13は刻みをもつ0隆帯の下に三叉文が施文される土器である。14・16は多段に横区画文縁帯が重層する土器で、14は隆帯に沿って幅広爪形文が施され、三角区画内には鋸歯文が充填される。16は一部に爪形文を付す隆帯に沿って半截竹管による平行沈線が施され、三角区画内にはRLの単節斜縄文を地文にした鋸歯文、半截竹管による平行沈線が施文される。15は刻みをもつ隆帯が弧状に施文される土器である。

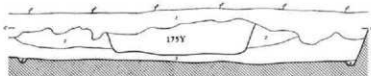
17・18は口縁部無文帯の口縁部破片である。17は頸部に刺突文をもつ隆帯を巡らし、18は口唇上に沈線がまわる土器である。

第14図1～4・6、第15・16図19～47は縄文時代中期後葉の加曾利EⅡ式土器である。

1は器高35.2cm、推定口径45.1cm、底径8.0cm。口径に比べ、器高が低いため、深鉢形土器というより鉢形土器であろう。外傾する口縁部は無文で、その直下には上下2本の隆帯により区画された文縁帯をもつ。区画内には渦巻文と沈線による楕円区画文が施文され、楕円区画内は縦方向の棒状沈線文によ



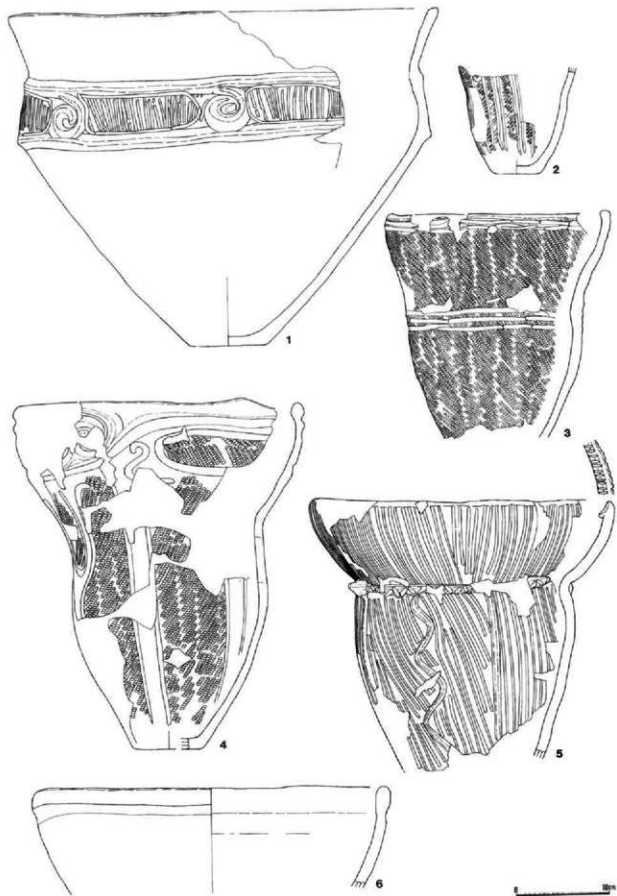
- 63J土層透視
- 1層 ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
 - 2層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土（3層よりやや黄色い）。
 - 3層 ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
 - 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
 - 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
 - 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
- } 柱穴



- 61J土層透視
- 1層 表土及び礫丸。
 - 2層 ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
 - 3層 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土（3層よりやや黄色い）。
 - 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。
 - 5層 炭化物粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
 - 6層 表土。
- } 9'



第13図 61・63号住居跡 (1/60)



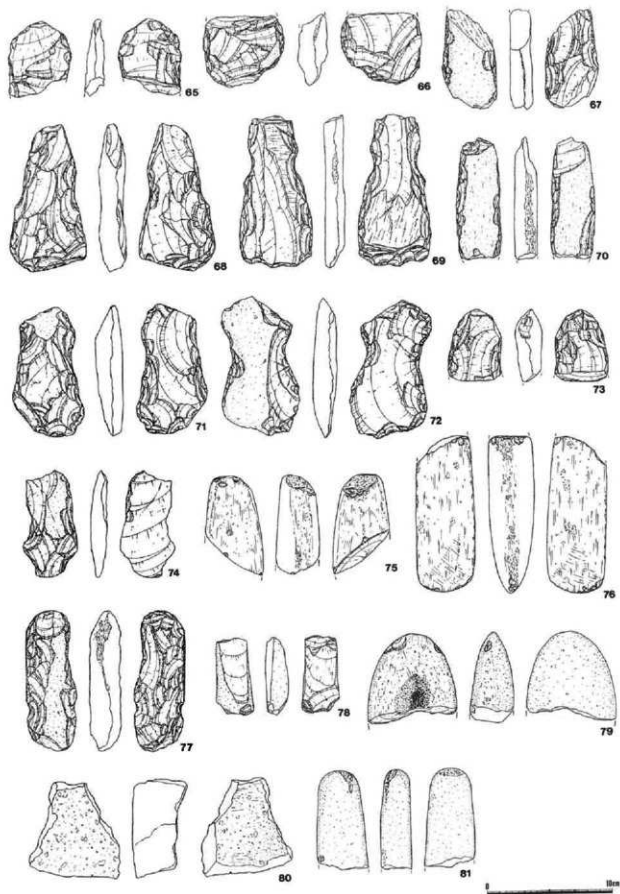
第14圖 61号住居跡出土遺物 1 (1/4)



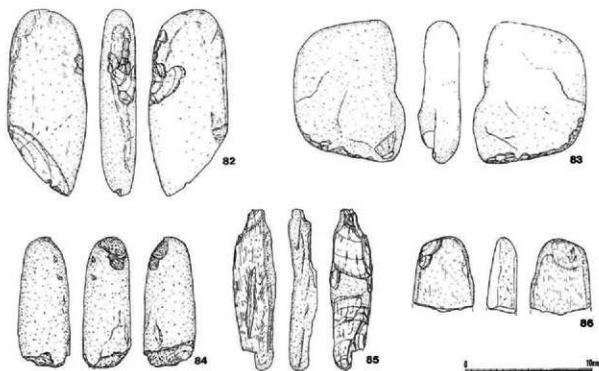
第15图 61号住居跡出土遺物 2 (1/3)



第16圖 61号住居跡出土遺物 3 (1/3)



第17図 61号住居跡出土遺物 4 (1/3)



第18図 61号住居跡出土遺物5 (1/3)

り充填される。北東コーナーのほぼ床面上からの出土で、遺存度は2/3程である。

19は大波状口縁を呈する口縁部の破片で、波頂部先端と口縁部文様帯に渦巻文が描かれ、さらに口縁部文様帯は沈線により楕円区画に分割され、その中を縦方向の棒状沈線文により充填される。

23は上下2条の隆帯により口縁部文様帯を成し、さらに上下を連結する隆帯により分割され、その中を棒状沈線文により充填される。1・19・23はいわゆる中鉢式系統の様相を残存する土器と思われる。

2は現器高11.9cm、底径5.0cm。磨消懸垂文が描かれる土器である。懸垂文の間隔は比較的に近接し、幅は狭い。また、「U」字状の下端部と思われる文様の一部がみられる。地文はRLの単節斜縄文である。北東コーナーの1の土器の上から重なるように出土し、胴部下半を2/3程遺存する。

3は現器高24.0cm、口径23.5cm。器形はキャリバー形を呈し、全面に縦方向のLRの単節斜縄文が施される土器である。口縁部外面と胴部くびれ部には2本乃至3本の沈線文が横走する。北東コーナー近くのほぼ床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

4は器高36.8cm、推定口径29.0cm、推定底径6.2cm。器形はキャリバー形を呈する土器で、口縁部文様帯には幅広の沈線により渦巻文・楕円文が施され、胴部文様帯にはRLの単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が施文される。北東コーナー近くのほぼ床面上からの出土で、遺存度は1/3程である。

6は現器高12.0cm、口径37.0cm。深鉢形土器に対し、浅鉢形土器であろう。口縁部は肥厚し、外面口縁部直下は沈線状に窪んでいる。炉跡上層からの出土で、口縁部から体部にかけて1/2程遺存する。

20～32は口縁部破片である。20は隆帯と幅広の沈線により楕円区画文が施文され、区画内はRLの単節斜縄文が充填される。21は口縁部直下に無文帯をもち、胴部全体に区画文が施文される土器で、区画内は縦方向にRLの単節斜縄文が充填される。22は隆帯と幅広の沈線により渦巻文と楕円区画文が描かれ、楕円区画内はRLの単節斜縄文が充填される。24・25・30は口縁部直下に隆帯がまわる土器で、その下方に24はLの撚糸文、25・30はRLの単節斜縄文が施文される。30の口唇上には半截竹管による

刺突文が巡る。26は幅広の沈線と隆帯の区画による口縁部文様帯内にはR Lの単節斜縄文が充填される。27~29は「∩」字状の文様が描かれる土器で、27の地文はLの無節斜縄文、28・29は単節斜縄文が施される。31は口縁部直下に刺突文がまわり、その下方にLの撚糸文を地文に2条の沈線が施文される。32は波状口縁を呈する土器で、口縁部文様は2本の沈線間に刺突列文が施文され、その下方にR Lの単節斜縄文を地文に縦位の沈線が観察される。

33は把手部分の破片で、地文としてLの無節斜縄文が施文されている。

34は有孔銅付土器の破片である。水平に延びる銅には2孔が穿たれている。内外面赤彩で、ていねいにヘラ磨きが施されている。胎土には暗黄褐色微粒子・砂粒を含む。

35~47は胴部から底部にかけての破片である。35は頸部に蛇行する細隆帯を巡らし、胴部にはL Rの単節斜縄文を地文に細隆帯による曲線文が施文される。36は頸部に隆帯を巡らし、胴部には磨消懸垂文が施される。地文の縄文はR Lの単節斜縄文である。37は隆帯と幅広の沈線により「J」字状の懸垂文が施文される。地文はR Lの単節斜縄文である。38はRの撚糸文を地文に2本の隆帯による懸垂文が施文される。39は隆帯上に刺突列文が施文される土器である。地文はR Lの単節斜縄文である。

40~45は沈線により胴部懸垂文が描かれる土器である。40はR Lの単節斜縄文の地文に2本の沈線による懸垂文が描かれ、2本沈線間は僅かに磨かれるが、地文の縄文が顕著に残る。41はR Lの単節斜縄文の地文に蛇行する懸垂文が施文される。42~45は2本沈線間が磨消され、43は「U」字状文が施文される。46・47は無文地に曲線的な沈線文が描かれている。

第16図48~54は縄文時代中期後葉の連弧文系土器である。

すべて縦方向の条線を地文に文様が施文される土器で、49・50は口縁部、48・51~54は胴部破片である。48は連弧文の波頂部に同調し、その下方に栗形の楕円文が描かれている。49・50は口縁部直下に2本の沈線文がまわり、その下方に連弧文が描かれている。51・53・54は胴部下半に沈線による懸垂文が描かれており、51・54は蛇行する懸垂文が描かれている。

第14図5、第16図55~62は縄文時代中期後葉の曾利式系土器である。

5は現器高29.2cm、口径31.1cm。器形は口縁部に最大径をもつキャリパー形を呈し、器面全体の地文に半截竹管による平行沈線が施された土器である。口縁部と胴部との境界部にはヘラ状工具による刺突文が付された隆帯が巡り、そこから隆帯による直線文と蛇行文が交互に懸垂する。特に、直線文との交点には指で摘んで仕上げた星形の突起が付されている。また、口縁部内面は粘土を貼り付け複合口縁状につくり、その上面には半截竹管による刻みを付している。北東コーナーの床面上約20cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程度遺存する。

55~58は口縁部破片で、55・58は半截竹管による平行沈線を斜方向に描き地文とする土器である。55は胎土に暗黄褐色粒子・砂粒を多く含む。57は棒状工具により沈線文を縦方向に、56は箨形に描き地文としている。56の口唇部には刻みが付されている。58は59・62と同一個体と思われ、胎土には暗黄褐色粒子・暗茶褐色粒子・砂粒を多く含む。

59~61は胴部の破片で、59は半截竹管による平行沈線を縦方向に描き地文とし、その上に押捺をもつ隆帯が施される。60は箨形に沈線文を描き地文とし、その上に隆帯が施される。61は地文と懸垂文が沈線によって描かれた土器である。

62は底部付近の破片で、半截竹管による平行沈線を縦方向に描き地文とし、その上に押捺をもつ隆帯が施される。62は59と同一個体と思われる。

土製品 (第16図63・64)

いずれも土器小片の角が僅かに丸く緑取られたと思われるため、一応土製品として取り扱うことにした。土製円盤もしくは土鏝と思われる。63は重さ244g、64は重さ10.0g。

石器 (第17・18図65～86、第4表)

65～74は打製石斧、75～77は磨製石斧、78は両極石器、79は磨石(凹石)、80は石皿、81～84は敲石、85は有溝砥石、86は砥石である。

62号住居跡 (第12図)

[住居構造] 根切り溝の中に壁溝が1m程確認できたのみで、詳細は不明である。壁溝の北側にローム面からの深さ120cmの縄文時代のものと思われる覆土をもつピットが検出されたが、本住居跡のものは不明である。(壁溝) 上幅25cm・下幅10cm、確認面であるローム面からの深さは54cmを測る。

[遺物] 土器小破片が僅かに出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉(加曾利E式期)。

62号住居跡出土遺物 (第19図1～5)

1は縄文時代中期中葉の阿玉台式土器である。隆帯の上端に沿って結節沈線が施され、その上方には沈線により鋸歯文が描かれている。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母を含む。

2～4は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器である。2・3は口縁部小破片で、2の隆帯は上下2本の太沈線により作出されているようで、その下方には単節斜縄文が施される。3は隆帯により文様が描かれている。4は隆帯とまた内側を沈線によって楕円状に区画文が描かれる土器で、地文の縄文はLRの単節斜縄文が施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

5は縄文時代中期後葉の連弧文系土器である。連弧文は沈線が3本構成で描かれている。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。

63号住居跡 (第13図)

[住居構造] 61号住居跡と10号方形周溝墓に切られ、さらに攪乱により壊されているため、詳細は不明である。柱穴が数本検出されたが、本住居跡のものは不明である。(覆土) 2層に分層される。

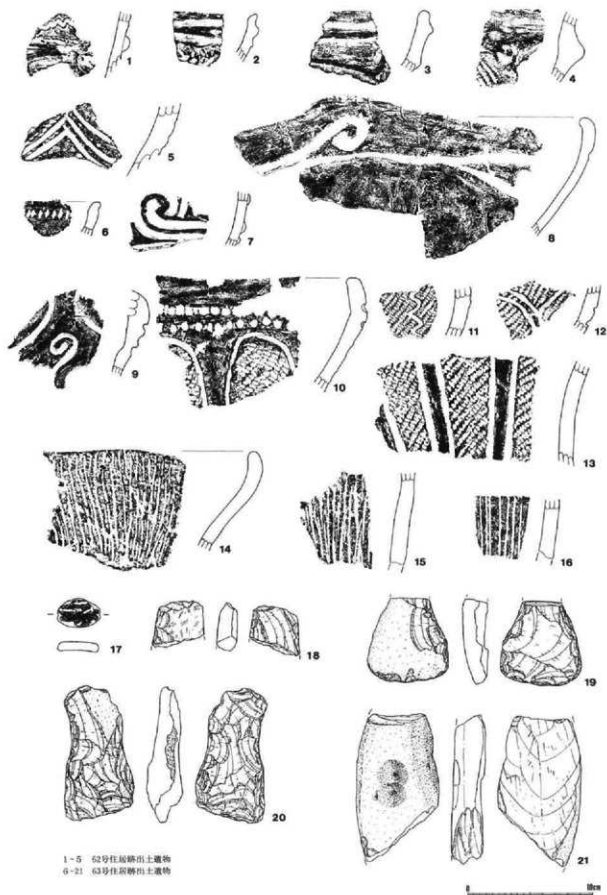
[遺物] 覆土中及び床面上から土器の破片が散在的に出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉(加曾利E式期)。

63号住居跡出土遺物 (第19図6～21、第4表)

6は縄文時代中期中葉の阿玉台式土器である。口縁部小破片で、外面口唇部直下には連続爪形文が描かれている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は金雲母を多く含む。

7～13は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器である。7は口縁部文様帯部分の小破片で、文様は2本1単位の隆帯により渦巻文が描かれている。8は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は波状口縁を呈し、その丸味のある波頂部の1ヶ所には沈線による渦巻文が描かれ、その下端には1本の沈線が横走する。9は波状口縁を呈する口縁部小破片である。波頂部には渦巻文が描かれる。10は口縁部に2段の円形刺突文がまわり、その下方には「∩」形の文様が描かれている。「∩」形の文様は磨消を伴うもので、区画内にはRLの単節斜縄文が施される。11はRLの単節斜縄文の地文に蛇行する懸垂文が描かれている。12はRLの単節斜縄文の地文に半截竹管により曲線的な文様が描かれている。13は2本



第19圖 62・63号住居跡出土遺物 (1/3)

沈線間を磨消した胴部懸垂文が描かれる土器で、R Lの単節斜縄文が地文に施される。

14~16は縄文時代中期後葉の曾利式系土器である。地文として、14・15は縦位の平行沈線、16は沈線が施される。14・15の平行沈線は半截竹管、16の沈線は棒状工具が使用されているものと思われる。

17は土鎌である。重さは72g。長軸両端には紐を結んだと思われる使用痕が観察される。

18~21は石器である。18は磨製石斧、19・20は打製石斧、21は石環である。

(2) 弥生時代後期~古墳時代前期

175号住居跡 (第20図)

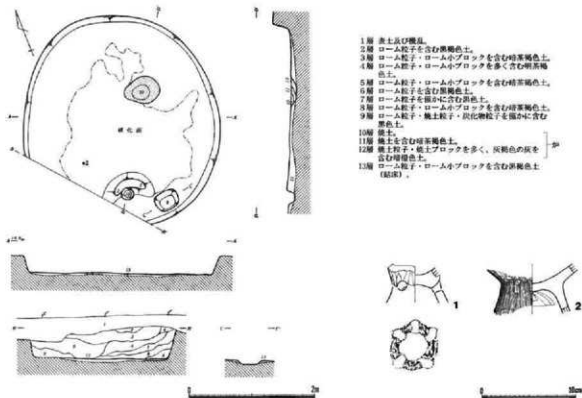
〔住居構造〕 61号住居跡を切る。住居の南西部分は、調査区域外にあるものと思われる。(平面形) 楕円形。(規模) 3.45×3.15m。(壁高) 25~34cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居中央が良く踏み固められていた。(炉跡) 住居中央よりやや北東に偏って位置する。60×45cmの楕円形を呈する地床炉で、10cm程の掘り込みをもつ。(柱穴) 入口部の梯子穴と思われる深さ10cmの小ピット1本が検出された。このピットの北側には、幅35cm・高さ2cmの凸堤が巡っている。(貯蔵穴) 南壁寄りに位置する。38×30cmの隅丸方形を呈し、深さは9cmを測る。覆土はローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 8層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕 覆土中及び床面上から土器が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期後葉。

175号住居跡出土遺物 (第20図)

1は高坏形土器で、5孔の穿孔をもつ脚台部破片である。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はヘラ磨き調整、外面はヘラ削り調整が施される。覆土中からの出土である。

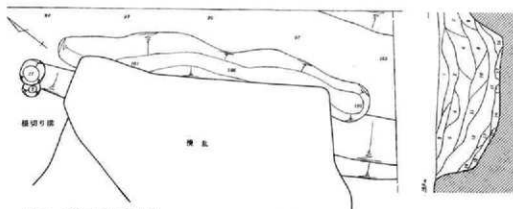


第20図 175号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)

2は台付甕形土器の胴部下半から脚台部にかけての破片である。現器高5.5 cm。色調は黒褐色を呈し、胎土には暗橙色粒子を多く含む。内面はヘラナデされるが、胴部はその後僅かにヘラ磨き調整が施される。外面はハケ目調整が施される。住居跡中央から南壁寄りの床面上からの出土である。

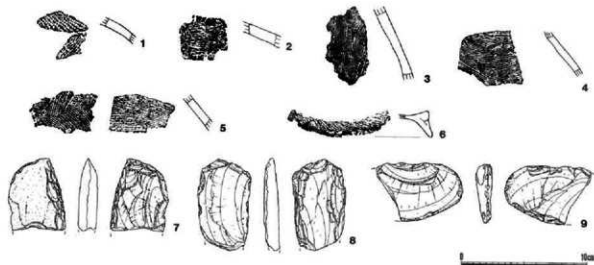
10号方形周溝墓 (第21図)

[周溝の構造] 63号住居跡を切る。本遺構は、北側を根切り溝に切られ、南側と東側は調査区域外、さらに西側も大きく攪乱により破壊を受けているため、構造的には詳細不明である。確認できた周溝部分は、ほぼ南北に走行し、深さ87~106cmで北側の方が浅くなっている。(覆土) 17層に分層される。周溝に流れ込む土層は内側では暗茶~明茶褐色土を基調とした明るい土層、外側では黒色~黒褐色土を基調とした暗い土層である。



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1層 ローム粒子を僅かに含む黒色土。(3層よりやや暗色)。 | 10層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。 |
| 2層 ローム粒子を僅かに含む黒色土。(3層よりやや暗色)。 | 11層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。 |
| 3層 ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。 | 12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。 |
| 4層 ローム粒子を含む暗茶褐色土(3層よりやや明色)。 | 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。 |
| 5層 ローム粒子を含む暗茶褐色土(3層よりやや暗色)。 | 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。 |
| 6層 ローム粒子を含む黒色土。 | 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。 |
| 7層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。 | 16層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土。 |
| 8層 ローム粒子を含む暗褐色土。 | 17層 ロームブロック。 |
| 9層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。 | |

第21図 10号方形周溝墓 (1/60)



第22図 10号方形周溝墓出土遺物 (1/3)

[遺物] 多くが縄文中期の遺物であったが、該期のものとして、僅かに土器小破片・石器が出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代初頭。

[所見] 本遺構は、平成9年度に西原特定土地区画整理に伴う発掘調査(第25-Ⅱ地点)で調査された10号方形周溝墓の西側延長部分の東溝に該当するものと考えられる。

10号方形周溝墓出土遺物(第22図、第4表)

1・2は壺形土器である。1は肩部文様帯部分の小破片で、羽状の単節斜縄文が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には暗褐色粒子を含む。2は網目状熱糸文が施される。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色粒子を含む。

3は高坏形土器の脚部破片である。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後へラ磨き調整が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には暗黄褐色粒子を含む。

4～6はハケ罫の小破片で、4は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には暗茶褐色・暗黄褐色粒子を含む。5はハケ目が上下羽状風の構成をとる。色調は内面が暗黄褐色、外面は黒色を呈し、胎土には暗褐色粒子を含む。6は脚部破片である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

7～9は石器である。7・8は削器、9は石包丁である。

(3) 遺構外出土遺物(第23図、図版10-1～5、第4表)

縄文時代の土器・土製品・石器と中・近世の陶器・瓦器が検出されている。

第1群 縄文時代中期前葉の五領ヶ台式土器(第23図1・2)

1は1条の隆帯と半截竹管による平行沈線により曲線的な文様が描かれる土器である。色調は明褐色を呈し、胎土には黄褐色微粒子を含む。

2は隆帯による懸垂文の間にRLの単節斜縄文を地文とした結節文が垂下した土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。

第2群 縄文時代中期中葉の阿玉台・勝坂式土器(第23図3～9)

3・4は結節沈線により文様が描かれる土器である。3は細い工具により渦巻文が描かれている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。4は横方向に沈線と角押文が描かれている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含む。

5・8は刻みをもつ隆帯と曲線的な沈線文が描かれる土器である。5は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。8は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。

6・7は隆帯に沿って太書きによる押し文が施される土器である。6は色調が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。7は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

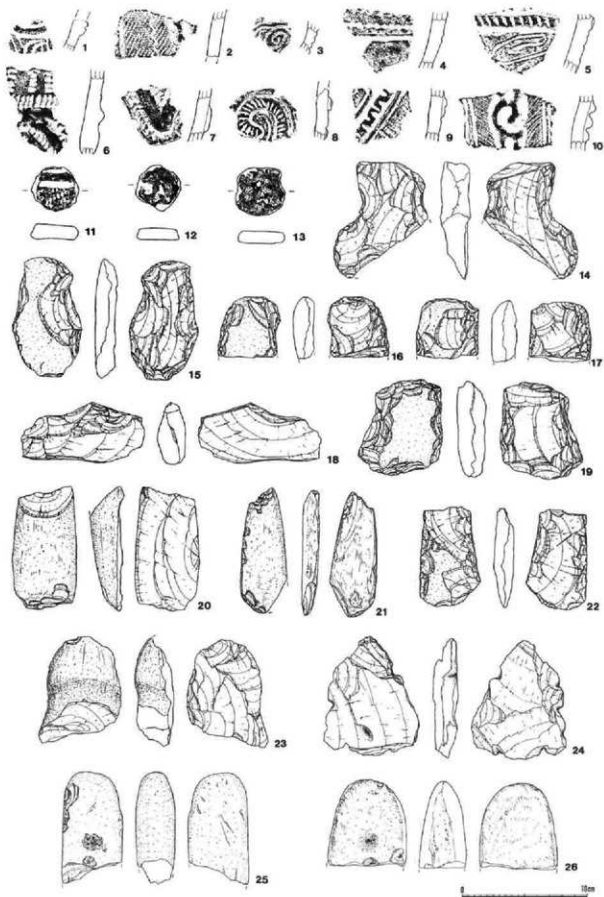
9は斜行する隆帯上に交互刻みが施され、隆帯に沿って竹管文が描かれる土器である。地文の縄文はRLの単節斜縄文である。

第3群 曾利式土器(第23図10)

10は2本1単位による沈線と渦巻文を描く隆帯による懸垂文が施される土器である。地文は半截竹管による平行沈線により綾杉状を呈している。

第4群 縄文時代の土製品(第23図11～13)

11・12は土製円盤である。11は重さ19.2g。比較的丸く成形されている。使用された土器は加曾利E式土器で、文様はRLの単節斜縄文を地文に2本の沈線が垂下している。12は重さ14.2g。やや正方



第23图 遺構外出土遺物 (1/3)

(単位mm・g)

図版番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
第20図65	61号住居跡	打製石斧	ホルンフェルス	(61.78)	50.03	6.90	48.0
66	*	打製石斧	粘板岩	56.05	63.40	3.13	99.0
67	*	打製石斧	砂岩	79.75	43.01	8.49	68.6
68	*	打製石斧	ホルンフェルス	117.93	61.37	1.84	152.2
69	*	打製石斧	緑色片岩	119.06	57.83	7.92	139.6
70	*	打製石斧(器種不明)	黒雲母片岩	(95.47)	34.94	7.11	89.0
71	*	打製石斧	ホルンフェルス	103.60	56.89	0.81	139.5
72	*	打製石斧	砂岩	(111.65)	61.62	7.72	122.8
73	*	打製石斧	ホルンフェルス	(54.93)	42.18	1.16	62.9
74	*	打製石斧製作剥片	砂岩	84.88	42.85	2.14	46.4
75	*	磨製石斧	砂岩	(78.75)	43.32	4.11	166.0
76	*	磨製石斧	玄武岩	(123.23)	46.71	6.44	364.3
77	*	磨製石斧未製品	砂岩	111.01	39.28	5.08	144.9
78	*	両極石器	粘板岩	61.81	30.23	6.82	43.3
79	*	磨石(凹石)	閃緑岩	72.86	70.62	3.81	172.1
80	*	石皿	安山岩	81.27	71.30	7.85	219.8
81	*	敲石	砂岩	81.06	39.95	4.03	115.2
第21図82	*	敲石	砂岩	147.39	62.03	7.32	386.4
83	*	敲石	砂岩	112.13	83.14	2.17	417.2
84	*	敲石	閃緑岩	102.79	38.33	1.05	229.4
85	*	有溝砥石	蛇紋岩	127.79	33.36	1.30	96.3
86	*	砥石	砂岩	(58.08)	47.66	2.03	96.0
第22図18	63号住居跡	磨製石斧	砂岩	41.59	35.91	6.16	28.6
19	*	打製石斧	砂岩	(67.74)	64.67	0.95	103.2
20	*	打製石斧	砂岩	106.60	56.12	6.23	166.7
21	*	石皿	緑色片岩	(118.76)	66.23	4.11	271.1
第25図7	10号方形周溝墓	削器	粘板岩	(58.17)	(42.8)	14.24	46.8
8	*	削器	珪質片麻岩	(72.66)	42.00	1.40	47.2
9	*	石包丁	ホルンフェルス	(62.23)	48.65	3.91	32.8
第26図14	遺構外	打製石斧	砂岩	(94.19)	(75.3)	21.69	127.8
15	*	打製石斧	砂岩	97.15	55.89	5.95	107.9
16	*	打製石斧	ホルンフェルス	(51.90)	47.26	6.07	54.1
17	*	打製石斧	ホルンフェルス	(48.47)	49.77	9.64	71.7
18	*	打製石斧素材剥片	ホルンフェルス	48.95	98.49	0.79	93.4
19	*	打製石斧	砂岩	74.68	74.47	3.58	139.0
20	*	磨製石斧	砂岩	(97.98)	(51.9)	(26.13)	167.6
21	*	磨製石斧	蛇紋岩	98.76	36.06	12.18	65.5
22	*	削器	砂岩	79.31	47.94	6.04	67.5
23	*	石棒	緑色片岩	(87.80)	(62.2)	(30.08)	173.3
24	*	多孔石	緑色片岩	(94.89)	74.29	7.05	131.3
25	*	敲石	砂岩	(89.36)	47.14	0.04	193.2
26	*	磨石(凹石)	閃緑岩	71.30	61.65	3.87	227.8

第4表 西原大塚遺跡第39地点出土の石器一覧表

形に近い形を呈している。文様は不明である。

13は土錘である。重さは20.4g。文様は不明である。

第5群 縄文時代の石器（第23図14～26、第4表）

すべて10号方形周溝墓に混入した石器である。14～19は打製石斧、20・21は磨製石斧、22は削器、23は石棒、24は多孔石、25は敲石、26は磨石である。

第6群 中・近世の遺物（図版10-1～5）

1は瀬戸の大型の灰軸徳利の底部小破片と思われるが、灰軸が内面底部に付着していることから、大鉢である可能性もある。

2は瀬戸の灰軸鉢の底部小破片である。高台は付高台で、切痕が付く。

3は瀬戸の鉄軸皿の口縁部小破片で、時期は19世紀代である。

4は瀬戸の灰軸掛け分け碗（げんこつ碗）の口縁部小破片で、時期は19世紀前半である。

5は瀬戸の鉄軸播鉢の小破片で、時期は18～19世紀であろう。

第4章 中道遺跡第44地点の調査

第1節 遺跡の概要

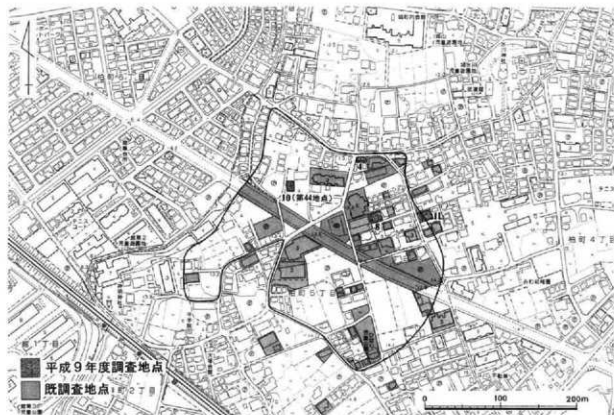
(1) 立地と環境

中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川流域右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約13m、南端で約14m、低地との比高差は約7mである。遺跡周辺の現況は、都市計画道路富士見・大原線の開通とともに各種開発が激増しており、それに伴い畑地は減少している。

本遺跡は、昭和62(1987)年の都市計画道路富士見・大原線建設に伴う発掘調査(第2地点)を契機に本格的に実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

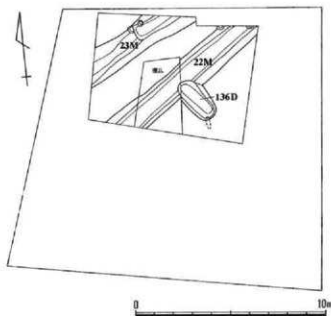
(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成9年9月18日に実施した。調査区域内に3本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った結果、平行する2本の溝跡(22・23M)と土坑(136D)1基を確認した。そのため、確認調査の結果を事業者に報告し、協議を行った。その結果、現状保存は不可能であるということから、継続して教育委員会が発掘調査を実施することに決定した。その後、遺構のプランを確認しながら、バックホーで周囲の表土剥ぎ作業を行った。残土置場については、遺構の分布



第24図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

平成11年11月30日 現在



第25図 遺構分布図 (1/200)

しない調査区南半部にその置場を確保することができた。

人員導入による発掘調査は9月24日から実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、22・23Mの精査を開始する。23Mは、同日にはほぼ掘りを終了した。

25日、136Dの精査を開始する。深くなってきたため途中までの土層図の実測を終了させ、さらに掘り下げる。22・23Mは写真撮影終了後、平板実測・断面図等の実測を行う。

10月1日、23Mの実測を終了、さらに136Dの写真撮影・平板実測・断面図等の実測も終了し、すべての調査を完了する。2日には埋め戻しを完了する。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 土坑

136号土坑 (第26図)

〔構造〕 22号溝跡に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) $2.50 \times 1.24\text{m}$ 。(長軸方位) $N-39^\circ - W$ 。(深さ) 2m前後を測る。深さ1.90m程のところで一坦平らになっており、途中の16・17層はロームブロックを多く含む粘土質の覆土であった。また、坑底面からは明瞭な工具痕が確認できた。確認面より1.36m下に、奥行70cm程の横穴が検出された。(覆土) 19層に分層される。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 覆土の観察から、平安時代から中世にかけての時期に比定されるものと思われる。

(2) 溝跡

22号溝跡 (第27図)

〔構造〕 136号土坑を切る。 $N-52^\circ - E$ の走行角度をもつ。確認できる範囲での長さは9.30m、上幅

165～177cm、下幅57～75cm、深さ89～96cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈する。
 (覆土) 11層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、近世以降と思われる。

23号溝跡 (第27図)

[構造] N-60°-Eの走行角度をもつ。確認できる範囲での長さは6.50m、上幅135～160cm、下幅40～55cm、深さ29～52cmを測る。溝底は東北側が一段下がっている。断面形は皿状を呈する。(覆土) 6層に分層される。

[遺物] 覆土中から素焼土器・磁器などの小破片が僅かに出土した。

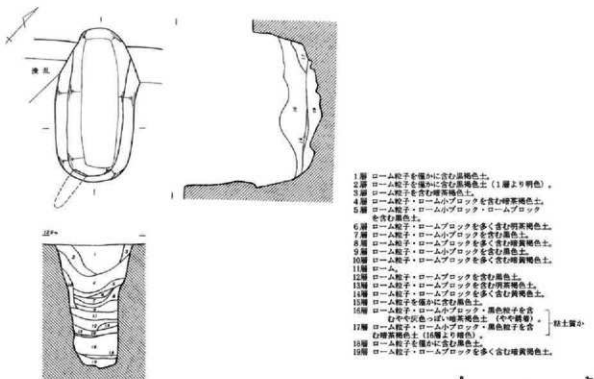
[時期] 近世 (18～19世紀)。

23号溝跡出土遺物 (図版12-3)

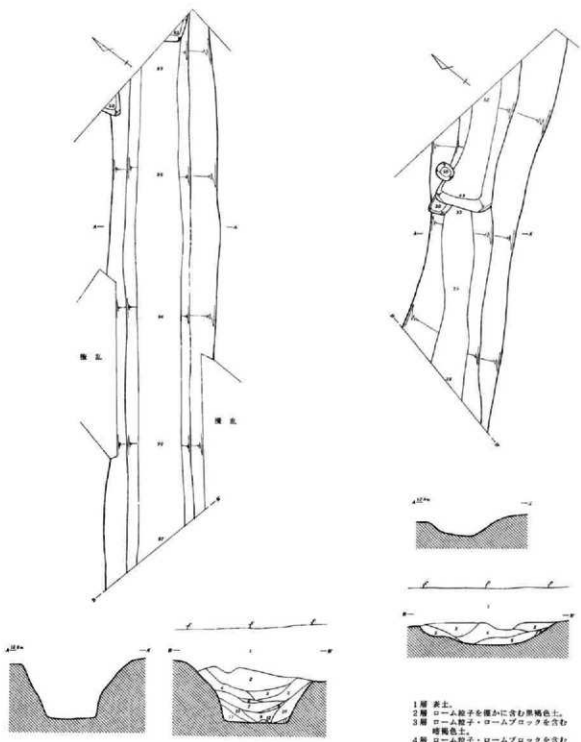
- 1・2は素焼土器である。1は口縁部小破片で、2は体部小破片である。時期は18～19世紀であろう。
- 3は瀬戸の灰粘土の口縁部小破片である。時期は18世紀代である。
- 4・5は肥前系の磁器碗の口縁部小破片で、4は染め付けによる輪花文が描かれる。
- 6は緑泥片岩の破片である。板碑の小破片である可能性がある。

(3) 遺構外出土遺物 (第28図)

縄文時代の土器が検出されている。時間的には早期～後期に比定され、第1～6群土器に分類された。



第26図 136号土坑 (1/60)



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 12層 ローム小ブロック。

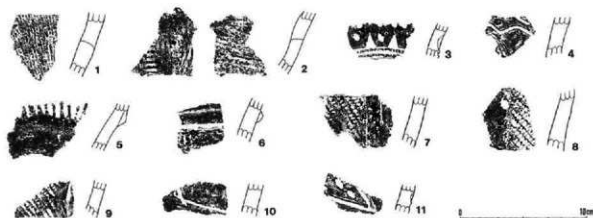
- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 7層 ローム小ブロック。

23号溝跡

22号溝跡



第27図 22・23号溝跡 (1/60)



第28図 遺構外出土遺物 (1/3)

第1群土器 早期前葉の燃糸文系土器 (1)

縦位にやや粗くRの燃糸文が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には白色微粒子・砂粒を含む。

第2群土器 早期後葉の条痕文系土器 (2)

表裏条痕の土器である。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含み、繊維混入は少ない。

第3群土器 前期後葉の十三菩提式土器 (3)

三角印刻文と刺突列文の下端には2条の結節浮線文がまわる。色調は内面が暗赤褐色、外面が暗黄褐色を呈する。胎土には砂粒・小石を多く含む。

第4群土器 中期中葉の阿玉台・勝坂式土器 (4・5)

4は曲線的な沈線文が描かれる土器で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には雲母・砂粒を多く含む。

5は隆帯の上端に沿って、幅広刺突文が配される。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

第5群土器 中期後葉の加曾利E式土器 (6～9)

6は口縁部と胴部との境界に隆帯がまわり、胴部にはLの燃糸文が施される。

7～9は単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が施される土器である。7は縄文部と磨消部との境には微弱的な沈線が施され、8・9は微隆起線文である。

第6群土器 後期後葉の称名寺・堀之内式土器 (10・11)

10は無文地に直線的な沈線文が描かれる土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

11は沈線区画内に刺突文が施されている。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

[参考文献]

- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集
 佐々木保俊 1996「第13章 中道遺跡第21地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点西原大塚遺跡第13地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
 尾形則敏 1989「第4章 中道遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会

- 1992「第2章 中道遺跡第12地点の調査」〔中道遺跡第12 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書〕志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
- 1992「第3章 中道遺跡第13地点の調査」〔中道遺跡第12 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書〕志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1996「第3章 中道遺跡第33地点の調査」〔志木市遺跡群Ⅷ〕志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
- 1997「第6章 中道遺跡第36地点の調査」〔志木市遺跡群Ⅷ〕志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 1997「第7章 中道遺跡第37地点の調査」〔志木市遺跡群Ⅷ〕志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 1999「第7章 中道遺跡第41地点の調査」〔志木市遺跡群Ⅸ〕志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
- 野沢 均・尾形則敏 1996「第13章 中道遺跡第26地点の調査」〔城山遺跡第12地点城山遺跡第13地点西原大塚遺跡第13地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点〕志木市の文化財第24集 志木市教育委員会

第5章 ま と め

ここでは、平成9年度に国庫補助対象事業として、発掘調査を実施した西原大塚遺跡第37・39地点、中道遺跡第44地点の3地点について、調査所見をまとめることにする。

〈西原大塚遺跡第37地点〉

第37地点では、弥生時代後期中葉から古墳時代前期にかけての住居跡が7軒と時期不明の土坑4基が検出された。中でも、165号住居跡からは比較的によく土器が出土している。出土した土器の器種は、高坏・埴・甕に分類され、特に、高坏については、第8図3が元屋敷式系の特徴を示すことから、この住居跡については古墳時代前期に比定することが可能であろう。また、第9図13の高坏は脚台部の裾部が有段を呈することから、菊川式系統の特徴を残存する土器と考えられる。

168号住居跡からは、ハケ甕（第8図8）の他に全体の器形が復元可能な輪積み甕（第8図9）が出土していることに注目されるが、166・167・169号住居跡からも輪積み甕の小破片が3点（第9図25・27・34）出土している。輪積み甕については、今までに市内から西原大塚遺跡第8地点の1号方形周溝墓から口縁部小破片が1点出土しているのみであったため、今回の資料の追加により、当地の弥生文化の成立や波及についてを考える上では、東京湾沿岸の地域との結び付きを積極的に示すものとなったと言える。

さらに、今回検出された輪積み甕については、成形技法上の違いにより、以下のように3分類することができた。

- 1類-輪積み痕の段は明瞭で、輪積み1段につき、指頭押捺を加え、1段1段でいねいに仕上げられている（168号住居跡出土土器 第8図9）。
- 2類-輪積み痕の段は不明瞭で、指頭押捺は輪積みの1段ずつに加えられたのではなく、すべての粘土が積まれた後に乱雑に加えられている。そのため、輪積みの接合部分にまたがり指頭押捺が観察できる（167・169号住居跡出土土器 第9図27・34）。
- 3類-ヘラナデにより輪積み痕が消去されている（166号住居跡出土土器 第9図25）。

このように分類すると、1類から2類については、成形技法の省略として看守でき、これは時間軸上での新旧として理解できる。3類については輪積み痕を消去するということから、成形技法の省略として理解するより、製作意図として読み取ることができよう。3類は1類との比較では時間軸上での新旧を意味するものと考えられるが、2類との比較では、単純に新旧関係で捉えるには危険がある。

また、これらの1類・2類・3類についても当然時間軸上での存続幅があると考えられるため、この属性のみで細かい時間を設定するのは不可能であるの言うまでもない。しかし、明らかに古墳時代前期に比定される165号住居跡の出土土器や遺構の切り合い関係及び配置などからみて、本地点で検出された7軒の住居跡（165～171号住居跡）については、一時期の所産のものではなく、時間的に併行あるいは新旧関係が存在するものと理解できる。

そこで、本地点で検出された7軒の住居跡について、大まかに時間軸上での変遷を考えることにしたい。まず、168号住居跡と169号住居跡については、輪積み甕の1類と2類の差として、隣接する住居跡であることから、169号住居跡に先行して168号住居跡が存在したと考えたい。168号住居跡と166号住居跡についても輪積み甕の1類と3類の差から、やはり166号住居跡に先行して168号住居跡が存在したと考えられる。次に、165号住居跡と171号住居跡については、遺構の切り合いから、171号住居跡に先行して165号住居跡が存在したことが明らかである。

以上をまとめると、次のような関係が成り立ち、大まかに第1～3期に設定することが可能である。



しかし、これでは、第2期の166・167・169・171号住居跡については、第1期より新しく、第3期より古いと言うことはできても、相互間での併行関係については判断できないはずである。さらに、171号住居跡については、出土した土器で図示できるものが無いため、他の住居跡との比較も無理と言える。

そこで、今回検出された第1期と第3期の時期を時間軸上に位置付けることにより、どれだけの時間幅があるかを抽出し、第2期についてをもう一度検討することにした。

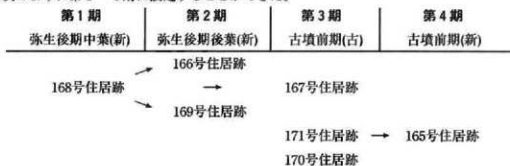
まず、第1期の168号住居跡出土土器については、東京都新宿区下戸塚遺跡の分析を参考にすると、輪積み甕・ハケ甕の特徴が、下戸塚3期に比定できることから、弥生時代後期中葉まで遡って考えられる。なお、下戸塚では、輪積み甕の退化形態の土器（下戸塚62住2）を4期に比定されていることから、今回の輪積み甕の1類と2類には、時間差があることが理解できる。

第3期の165号住居跡出土土器については、前述では元屋敷式系の高坏により、古墳時代前期に比定したが、週間編年では7・8期（Ⅲ式期）に相当するものである。

以上から、第1期から第3期までの時間幅は、弥生時代後期中葉から古墳時代前期に対応し、同時に第2期は弥生時代後期後葉から古墳時代初葉までの時間幅の中で捉えられる可能性があることがわかった。

そこで、第2期の時間幅を細分するために、住居形態に着目すると、第1期の168号住居跡は、円形を呈し、第3期の165号住居跡は方形を呈していることから、住居形態は、第1期から第3期への大きな変化として、「円形→方形」と理解できる。そして、第2期の166・167・169・171号住居跡については、大略隅丸方形を呈していることから、住居形態が、第1期では円形、第2期では隅丸方形、第3期では方形というように、「円形→隅丸方形→方形」の順で変化していることを確認することができた。さらに、第2期の特徴である隅丸方形でも、166・169号住居跡と167・170・171号住居跡を比べると、前者より後者の方が方形に近いことがわかる。

このように、住居形態が、「円形→隅丸方形→方形」という時間的な変化傾向にある中で、第2期における隅丸方形の形態がより方形に近いものを新しいと想定した場合、第2期を2分することが可能になり、次のように第1～4期に設定することができた。



以上、今回検出された7軒の住居跡を第1～4期の4時期に細分したが、第1期と第2期の間にはまだ、弥生時代後葉（古）段階の1時期が設定可能であることを考えると、西原大塚遺跡全体で200軒を

越える弥生時代から古墳時代の住居跡は、少なくとも5期区分に細分されることは可能であろう。

今後は、志木市あるいは関東を視野に入れた広い範囲においての弥生時代から古墳時代の文化についてを考える上でも、西原大塚遺跡の豊富な資料を調査報告書として報告し、基礎的な分析をすることは重要なことであり、急務であろうと痛感する。

〈西原大塚遺跡第39地点〉

第39地点では、縄文時代中期後半の住居跡が3軒、弥生時代後期後葉の住居跡1軒、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓1基が検出された。

縄文時代では、特に61号住居跡から多くの土器・石器が出土していることより、この住居跡は、加曾利EⅡ式期に比定されよう。土器の特徴としては、口縁部文様帯に退化の傾向が表れており、第14図4の土器は口縁部と胴部の文様帯にはっきりした境界が失われ、一体化の文様に成りつつあるものである。また、第14図1の土器の無文帯の口縁部直下の文様部の渦巻き文については、横方向への連結した文様ではなく、独立し、単的な文様に変化したものとみることができる。また、曾利式系や連弧文系の土器の共存例を豊富にもつことから良好な資料として評価できるであろう。

弥生時代後期後葉の175号住居跡と弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての10号方形周溝墓については、今回の調査で出土した遺物は僅かであるため、決して良好な資料とは言えないが、10号方形周溝墓から、当市では、該期のものとして初めて、石器3点が出土したことに注目される。1点は石包丁(第22図9)、2点は搔器(第22図7・8)であった。

また、この10号方形周溝墓は、平成9年度の西原特定土地区画整理に伴う発掘調査で検出された遺構と同一遺構であるものと考えられる。報告書の刊行はされていないが、その際の調査では、南溝中央にブリッジをもつ形態の方形周溝墓の一部が検出されている。また、出土遺物が周溝のブリッジ先端部の溝底上から土器群が一括で出土しており、その中には畿内系の土器と考えられる庄内1式(縦向2式)に比定される長脚の高坏や東海系の高坏などが含まれており、今後の報告に期待したい。

〈中道遺跡第44地点〉

今回の調査では、22・23号溝跡と136号土坑が検出されている。これらの遺構の時期については、出土遺物がなかったため、詳細は不明と言うしかないが、覆土の観察から、2本の溝跡は近世以降に、そして土坑は平安時代から中世にかけてに比定できる可能性がある。

22・23号溝跡については、昭和62(1987)年に今回の調査地点のすぐ南側の富士見・大原線(ユリノキ通り)の道路工事に伴う発掘調査が実施されている。その際にⅠ区で8・11号溝跡が検出されているが、今回の溝跡と走向角度を合わせてみると、うまく合致するものと思われる。また、東側の第12地点では溝跡が検出されていないことから、予想では第12地点のすぐ西側を走向しているものと思われる。

136号土坑については、規模2.50×1.24mで、平面形が楕円形を呈し、深さ2m前後であることから、構造的にやや特異なものであると言える。今のところ、市内では未報告資料であるが平成5(1993)年に調査された中野遺跡第28地点の30号土坑に類似があるのみである。

【引用・参考文献】

赤塚次郎 1990「V 考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

松本 完 1996『下戸塚遺跡の調査 第2部 弥生時代から古墳時代前期』早稲田大学校地埋蔵文化財調査室

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1983『特別展 三世紀の九州と近畿』

圖 版



1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



3. 165号住居跡遺物出土状態



4. 165号住居跡遺物出土状態



5. 165号住居跡遺物出土状態



6. 165号住居跡遺物出土状態



7. 165号住居跡



1. 166号住居跡



2. 167号住居跡



3. 168号住居跡遺物出土状態



4. 168号住居跡遺物出土状態



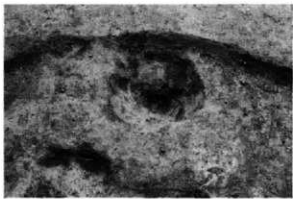
5. 168号住居跡貯藏穴遺物出土状態



6. 168号住居跡



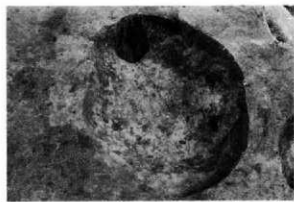
7. 169号住居跡



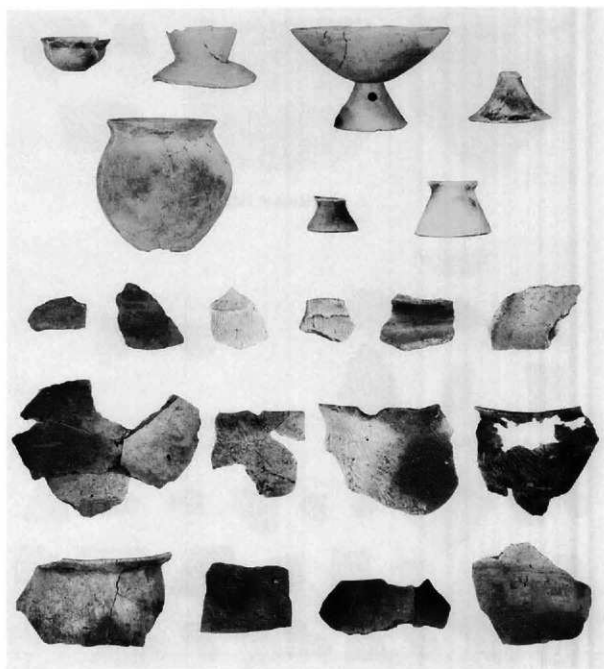
8. 169号住居跡貯藏穴



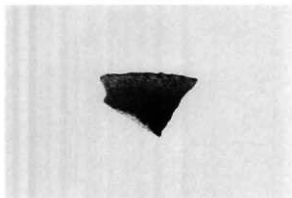
1. 282・283号土坑



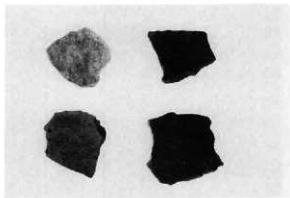
2. 285号土坑



3. 165号住居跡出土遺物



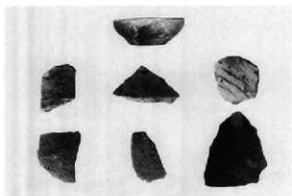
1. 166号住居跡出土遺物



2. 167号住居跡出土遺物



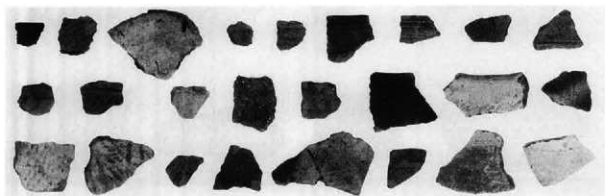
3. 168号住居跡出土遺物



4. 169号住居跡出土遺物



5. 170号住居跡出土遺物



6. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 61号住居跡発掘調査風景



3. 61号住居跡遺物出土状態



4. 61号住居跡遺物出土状態



5. 61号住居跡遺物出土状態



1. 175号住居跡



2. 175号住居跡遺物出土狀態



3. 10号方形周溝墓発掘調査風景



4. 10号方形周溝墓土層断面



5. 61号住居跡出土遺物



1. 175号住居跡



2. 175号住居跡遺物出土狀態



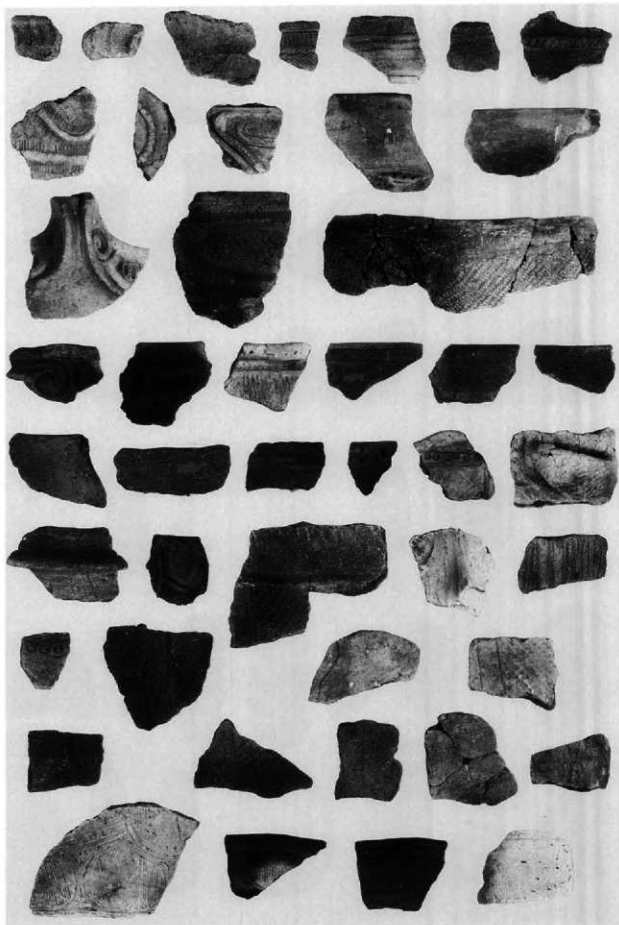
3. 10号方形周溝墓発掘調査風景



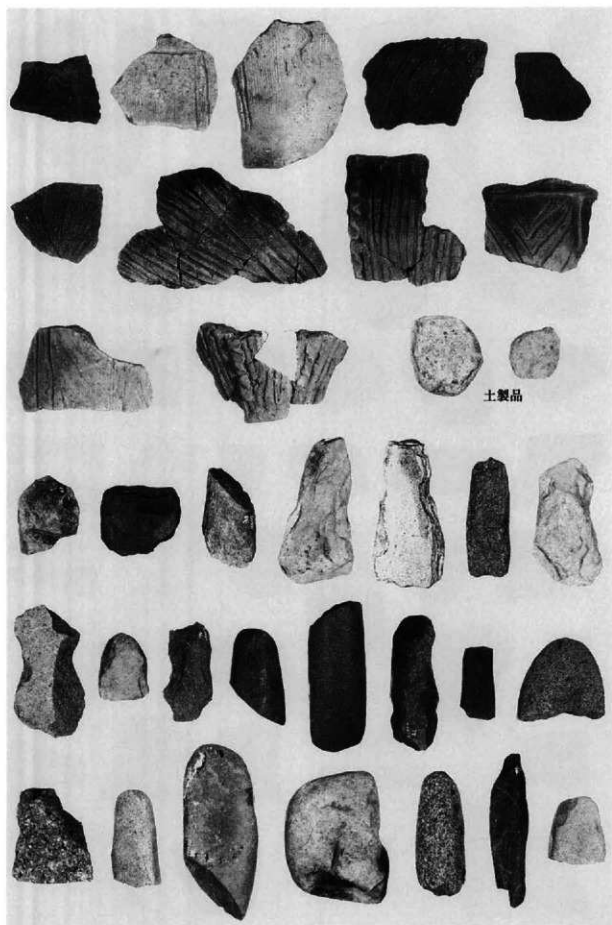
4. 10号方形周溝墓土層断面



5. 61号住居跡出土遺物

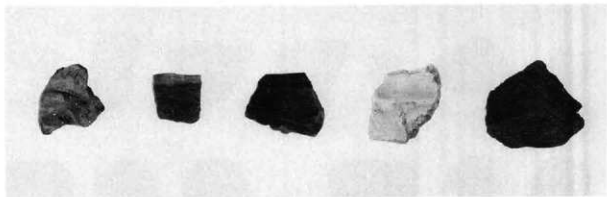


61号住居跡出土遺物

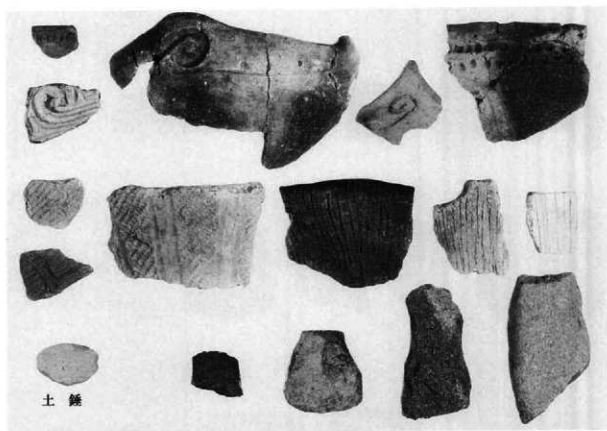


土製品

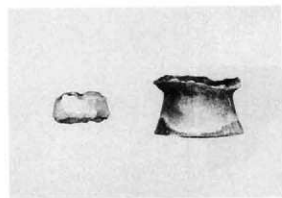
61号住居跡出土遺物



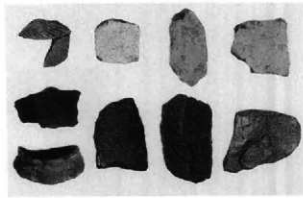
1. 62号住居跡出土遺物



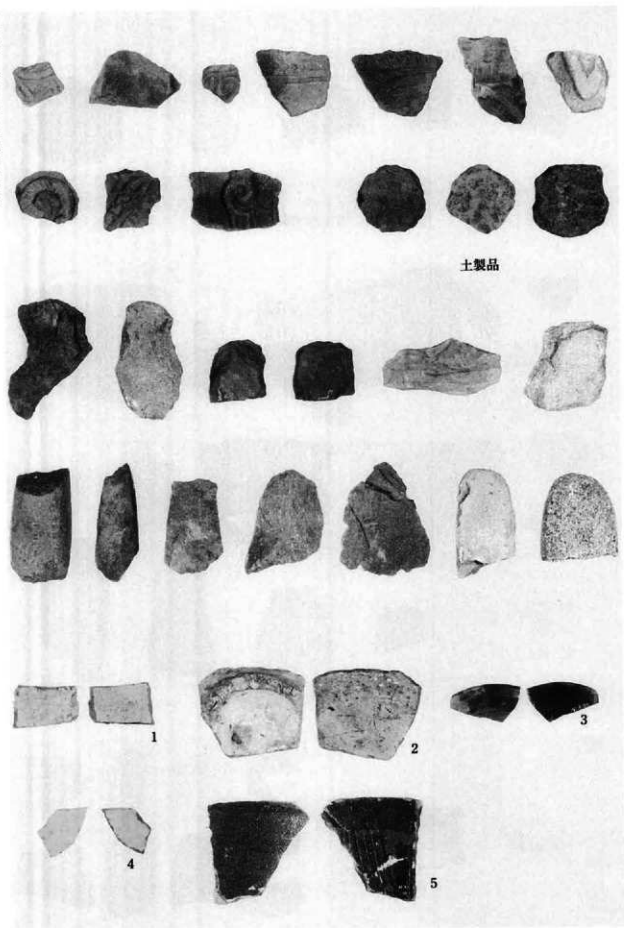
2. 63号住居跡出土遺物



3. 175号住居跡出土遺物



4. 10号方形周溝墓出土遺物



土製品

遺構外出土遺物



1. 調査区全景



2. 136号土坑調査風景



3. 136号土坑



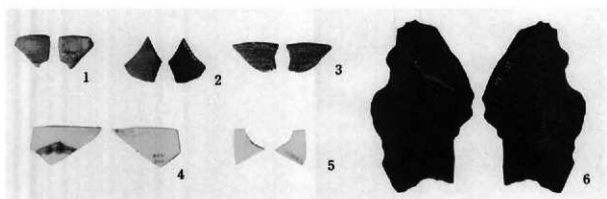
4. 136号土坑



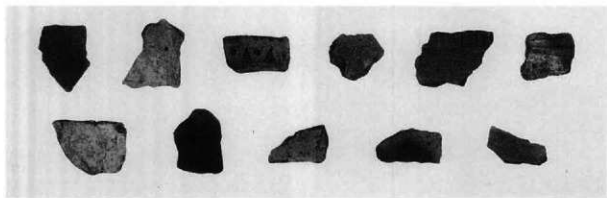
1. 22号溝跡



2. 23号溝跡



3. 23号溝跡出土遺物



4. 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん							
書名	志木市遺跡群 10							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財					巻次		
編著者名	尾形剛敏 深井恵子					巻次	第28集	
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 048 (473) 1111							
発行年月日	平成12 (2000) 年2月29日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")		()	
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第37地点)	しきしきいわいちよう 志木市幸町 3丁目3107-1の一部	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 00"	19970506 ～ 19970605	220.00	個人専用住宅
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第39地点)	しきしきいわいちよう 志木市幸町 3丁目3129-3	11228	007	35° 49' 16"	139° 34' 00"	19970807 ～ 19970828	63.76	個人専用住宅
なかみちいせき 中道遺跡 (第44地点)	しきしきいしわちよう 志木市柏町 5丁目2967-3	11228	005	35° 49' 34"	139° 34' 17"	19970924 ～ 19961001	221.28	個人専用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
西原大塚遺跡 (第37地点)	集落	弥生時代後期～古墳時代前期 不明		住居跡 7軒 土坑 4基		土器	168号住居跡からは、東京湾沿岸の地域との関連で考えられる輪郭が出土している。	
西原大塚遺跡 (第39地点)	集落	縄文時代中期 弥生時代後期 弥生時代後期～古墳時代前期		住居跡 3軒 住居跡 1軒 方形周溝墓 1基		土器、石器 土器 土器、石器(石丁・埴輪)	10号方形周溝墓からは、当市では初めて後期に比定される石器(石丁1点・埴輪2点)が出土した。	
中道遺跡 (第44地点)	集落	平安時代か 近世		土坑 1基 溝跡 2本				

志木市の文化財 第28集

志木市遺跡群 10

発行 埼玉県志木市教育委員会

埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成12(2000)年2月29日